



聖地 特集号





心の糧

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

われらは、世界のあらゆる所に住む人々がキリストのもとに来てキリストを神の御子として受け入れ、その啓示したもう律法に従うことにより、この世においては平安を得、来たるべき世においては永遠の救いにあずかるよう促すものである。

われらはキリストを信じ、またその神聖な使命を証する。

われらは、モルモン経に記されているがごとく、「全能の主キリストの御名によるほかには世の人に救いを与えることのできる名も道も方法も一切ない」(モーサヤ 3:17) ことを信ずる。

またわれらは、モルモン経の言葉のごとく、「過去、現在未来を通じて、救いは身代りの贖罪をなしたもう全能の主なるキリストの血に由って与えられる」(モーサヤ 3:18) ことを信ずる。

われらは神に感謝する。その大いなる恵みにかないて、予言者たちが再び召され、力と確信に満ちて、キリストと救いに関する真理を再度明らかにしたもうことを。いにしえの予言者たちが予言し、約束したがごとく、偉大な回復の時が到来した。キリストは、再び天から御姿を現わされ、神権と鍵は再び生ける使徒たちの頭上に固められた。古代の忠実な人々により享受された啓示、示現、奇跡、そしてもろもろの賜物と恵みは、今やキリストのもとに来て、人々の前でその聖なる御名を告白する人々に、また神がキリストを死者の中からよみがえらせ、主となし、王となしたもうことを真心から信ずる人々に与えられている。

かくして、権威ある立法官が言うがごとく、われらは、世界のあらゆる人々がキリストのもとに来て完全な者となり、罪深い己れを捨て、キリストを神の御子として受け入れ、自らのために、この世においては平安を得、来たるべき世においては永遠の救いにあずかるよう促すものである。主イエス・キリストの御名により。アーメン。

もくじ

今月の聖徒の道	49
聖地	ジェームス・R・クラーク 50
聖地の将来	ダニエル・H・ラドロウ 54
ユダヤ人の帰還	エルディン・リックス 63
教師	ハワード・W・ハンター 65
証の重要性	ジェームス・A・カリモア 66
雨ふりきかい	エイデン・ブラウン 69
紙にんぎょう	ピバリー・ジョンソン 73
モロナイ	マーベル・ジョーンズ・ガボット 75
点パズル	キャロル・コナー 76
方針、手続きおよびニュース	77
伝道の奇跡	ミルトン・R・ハンター 78
神との交わりを強くしよう	
スペンサー・W・キンボール	81
「人をさばくな。自分がさばかれないためである」	
N・エルドン・タナー	84
ヒーバー・J・グラント	
レオン・R・ハートショーン	88
ローカル・ニュース	94

今月の表紙

大きい方の写真は、オリブ山から見たエルサレムで、ドイル・L・グリーン撮影によるもの。他はローレル・G・コール撮影のもので、左から、年老いたユダヤ人、ユダヤ人の少女、山上の垂訓が語られた場所として知られるベアティテュード山（八福の教えの意）それに悲しみの壁で祈るユダヤ人である。

聖徒の道 2月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京デイスクリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定価 年間予約 1,300円 一部 130円

末日聖徒イエス・キリスト教会教会幹部

大 管 長 会

大管長

ハロルド・B・リー

第一副管長

N・エルドン・タナー

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

大 祝 福 師

エルドレッド・G・スミス

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・スティブレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

十二使徒評議員会補助

アルマ・ソニ

エルレイ・L・クリスチャンセン

スターリング・W・シル

ヘンリー・D・テイラー

アルビン・R・ダイヤー

フランクリン・D・リチャーズ

セオドア・M・バートン

バーナード・P・ブロックバンク

ジェームス・A・カリモア

マリオン・D・ハンクス

ジョセフ・アンダーソン

デビッド・B・ハイト

ウィリアム・H・ベネット

ジョン・H・バンデンバーク

ロバート・L・シンプソン

O・レスリー・ストーン

ジェームス・E・ファウスト

L・トム・ペリー

七十人最高評議員会

S・デルワース・ヤング

ミルトン・R・ハンター

A・セオドア・タトル

ポール・H・ダン

ハートマン・レクター・Jr.

ロレン・C・ダン

レックス・D・ピネガー

管 理 監 督 会

ビクター・L・ブラウン

H・バーク・ピーターソン

ボーン・J・フェザーストン

今月の聖徒の道

今月号には、聖地とユダヤ人の帰還に関する3編の記事を掲載しました。救い主の再降臨に先立って起こる主要なできごとのひとつは、ユダヤ人たちが、その受け継ぎの地へ帰ることです。ここ数年来、聖地周辺に起きている事件は、予言に通じ、救い主の降臨を待ち望む人々により、興味深く見守られています。

ジェームス・R・クラークによる「聖地一大管長会の声明から」は、ユダヤ人の集合に関して、この神権時代の予言者たちの述べた声明を編集したものです。

ダニエル・H・ラドロウによる「聖地の将来」は、予言の成就に伴って必ず起きるできごとに対する指針です。ラドロウ博士は、ブリガム・ヤング大学の宗教教育学部の学部長をつとめたこともあり、博士号取得後、エルサレムにあるヘブライ大学でも、研究に従事しました。現在、博士は教会内務伝達部教育資料担当主幹であり、そこで、教会で使用されるテキストや教材の出版を指導しています。

エルディン・リックスによる「ユダヤ人の帰還」は著者がユダヤ人と接触した時、教会が彼らに抱いている関心、そして、この神権時代の予言者たちの集合に関する予言に対し、彼らの示した反応を記した興味深い記事です。

今後、イスラエルの家と聖地に関して、さらに多くの記事を掲載する予定です。

ステーキ部・伝道本部住所

東京ステーキ部 〒107 東京都港区北青山3の6の9
TEL (03-407-2465)

大阪ステーキ部 〒560 大阪府豊中市岡町1の2の3
TEL (068-52-3734)

日本東伝道本部 〒063 札幌市中央区北2条西24の245
TEL (011-611-3697)

日本伝道本部 〒106 東京都港区南麻布5の8の10
TEL (03-442-7438)

日本中央伝道本部 〒657 神戸市灘区篠原本町4の6の28
TEL (078-88-2712-3)

日本西部伝道本部 〒810 福岡市中央区平尾浄水町46
TEL (092-52-6084)

聖地

大管長会の声明より

ジェームス・R・クラーク

回復に際してその中心となるテーマは、散乱したアブラハムの子孫の集合であり、その聖地の贖いである。

近代のイスラエル人の一部である末日聖徒が、1845年、彼らの家々や土地を追われた頃、当時教会を管理する機関であった十二使徒定員会は、古代のイスラエル人と近代のイスラエル人の誓約の類似を思わせる1通の回状を送った。その一部に次のように記されている。

「予言のみたまは、モルモン経ですと以前から、この国民が、末日のイスラエル人に対し何をなすかということを教えている。……モルデカイに対して行われようとした謀略と同じ邪悪が、またその民のすべての家族をねらっている。……ふたつのものは、一致しては共に歩むことはできない。エサウが国を治めている間ヤコブは国内に留まることはできなかった。約束の子が、流血に飢えかわく者から逃れることは、賢明なことであった。全世界の王国の世継ぎでさえ、殺りくを求める者が死ぬまで、急いで遠国に逃れられたのである。」

回復に先立ち、神の御前から送られた天使モロナイが、1823年にジョセフ・スミスを訪れたが、その時旧約聖書から予言を引用した。その中にはヨエル書の次の聖句がある。「すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。」(ヨエル2:32)

モロナイの訪れから10年、教会が組織されてから3年たって、ジョセフ・スミスは神の命により、すべての聖徒に警告の手紙を書き送った。その手紙には次のようにある。

「アブラハム、イサク、ヤコブの神が、その御手を再び伸ばしたもう時が遂に到来した。神の民の残された者をアッシリア、エジプト、パテロス、エチオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海の島々から呼びもどされる。また異邦人全部の救いをもたらし、イスラエルの罪が除き去られる時、約束された契約もうちたてられるのである。次の諸聖句を参照せよ。イザヤ書11章、ローマ人への手紙11:25-27、エレミ

ヤ書31:31-33。この契約は、いまだかつてイスラエルの家とうちたてられたこともなければ、ユダの家とたてられたこともない。なぜなら、契約には二者が不可欠であり、しかもその二者は同意しなければならず、そうでなければ、いかなる契約も結びえないからである。

しかし、ユダの部族は、旧エルサレムに帰る。……ユダはエルサレムで解放をその手中に収めるであろう。次の諸聖句を参照せよ。ヨエル書2:32、イザヤ書26:20-21、エレミヤ書31:12、詩篇1:5、エゼキエル書34:11-13。これら諸聖句は、よき羊飼いが御自分の羊たちの上に手を差し伸べられ、暗雲たち込める日に追い散らされたあるゆる国々から、シオンへエルサレムへと導き出されるであろうとの証である。²

「世界の四隅よりするイスラエル人の集合」の鍵は、古代の予言者であり立法者であったモーセが、1836年4月2日にカートランド神殿に現われた時彼によりジョセフ・スミスに与えられた。



ドイル・L・グリーン撮影

1840年4月6日、大管長会は、オルソン・ハイドがパレスチナへ赴く宣教師として召された旨の証明書を発行した。ハイドは、ロンドン、アムステルダム、コンスタンチノーブルそれにエルサレムの諸都市を訪れ、「祭司や統治者、ユダヤ人の長老たちと言葉を交わす」よう指示を受けた。オルソン、ハイドはその使命を果たし、聖地が奉獻された。

1843年4月6日、教会の総大会で、予言者ジョセフ・スミスは次のように述べた。

「ユダは戻り、エルサレムは再建されるに違いない。神殿も再建される。

水が神殿の下から湧き出て、死海の水はいやされるだろう。市の城壁と神殿が再建されるには暫く時がかかるであろう。しかし、これはすべて、人の子が訪れる前に起こるであろう。戦いがあり、戦いのうわさもあろう。……」³

2ヵ月後の1843年6月11日、聖徒の大会衆がノーブーの神殿敷地に集った際、予言者は説教の材料をマタイ伝の23章37節からとり、次のような質問のあったことを述べた。「ユダヤ人や、地上のあらゆる時代に神の民を集わせる目的は何だったのか。」

それに対する予言者の答えはこうであった。「主要な目的は、主のために

宮居を建て、そこで主がその民に御自身の宮居の儀式を啓示し、主の王国の栄光を現わし、人々に救いの道を教えることであった。というのは、人々が教えられ、実施できる時には、その目的のために定められた場所か宮居において行われねばならないある儀式と原則があるからである。」⁴

ジョセフ・スミスの死後、管理の鍵を保持していたブリガム・ヤングを会長とする十二使徒評議会は、ウィルフォード・ウッドラフをイギリスに派遣した。その時ウッドラフはイギリスにいた長老、聖徒たちに送るあいさつの手紙を携えて行ったが、その中には次



天使モロナイは聖地に関する
予言を引用した
教会インフォメーション・サービス



エルサレムを見おろすオリブの山で話す
N・エルドン・タナー副管長
デビッド・B・ガルブレイス撮影

のような指示がある。「イスラエルの神は、地上に神の王国を打ち建てるに必要なすべての事柄を、その弟子たちに伝えるであろう。それはイスラエル人が集められるためである。すなわち全地に散らされたアブラハムの血族が皆集められ、シオンが建設され、エルサレムが再建され、神の栄光と知識が全地にみなぎるようになるためである。」⁵

モルモンの西部への大脱出の終わった後の1849年、大管長会は聖徒たちに次のような指示を出した。「ユダから追われた者やエフライムの残りの者たちを集め、四方よりその受け継ぎの地に至らしめよ。かくしてシオンが打ち建てられ、エルサレムが再建され、末日の栄光が地を満たすのである。」⁶

1851年大管長会が教会に向けて発した第五の一般書簡には、次のようにあ

る。「イスラエル人の集合はすでに開始された。ユダヤは、その古代住民を受け入れている手であるし、聖なる市は再建の途上にある。これはメシアの訪れが近い、という顕著なしるしに他ならない。」⁷

末日聖徒イエスキリスト教会は1884年、トルコに伝道部を開設した。1889年9月22日、その伝道部で初めてアラブ人の改宗者たちが、アイン・タブの地

でバプテスマを受けたのである。1867年、ウィルフォード・ウッドラフ大管長と副管長たちは、トルコにいる「愛する兄弟姉妹たち」に向けて次のような手紙を送った。

「……キリストの降臨の時に、無益な詮議はしないように。確かに、定められた時はあるが、それは神だけが知っておられるのである。神はその時をまだ啓示されてはおられない。しかし、多くの人々の備えができていないうちに、この定められた時は確実にやってくるに違いない。この日が遠からぬことを我々は知っている。なぜならば、主の降臨のしるしが、現在歴然としているからである。しかし、その偉大なできごとのために備えておかねばならぬことがたくさんある。多くの正直な人々は、まだ主の偉大な末日の御業について聞いてはいない。シオンを完全に建設しなければならないし、エルサレムはユダヤ人によって再建されねばならない。十支族は北方から戻らねばならない。イスラエルの家に属するアメリカインディアンは、改宗して主の働き手とならねばならない。そして、イスラエルの家の様々な枝に属するさらに多くの者が、約束の地へ帰り、主にまみえ、主を迎える備えをしなければならない。なぜなら、主こそその降臨の折、彼らの王となられる御方であるからである。」⁸

パレスチナにユダヤ人の故国を建設するという、1917年11月2日の英国政府によるバルフォア宣言は、なかなか実現困難なことであった。1921年、アラブ人とユダヤ人が領土問題をめぐって紛糾している時、ヒーバー・J・グ

ラント大管長は、その年の4月の総大会で次のように述べた。

「地上に再び回復された神の聖なる神権の権能により、また神の予言者の命のもとに、主イエス・キリストの使徒たちはすでに聖地に赴き、かの地をユダヤ人の帰還のために奉獻した。主の時が来れば、彼らは再び主の目に適う者となるであろうことをわれらは信ずる。それゆえ、いかなる末日聖徒もこの民族に敵対する運動に加担して罪を犯すことのなきよう命ずる。」⁹

1959年3月2日、大管長会は、十二使徒評議員会のリグランド・リチャーズ長老の功績を讃える書簡を、ステーク部長、ステーク部伝道部長あて発送した。リチャーズ長老は大管長会の指示を受けて、ユダヤ人たちが回復された福音を探し求めるよう、並々ならぬ努力を払ったのである。またその書簡で、ユダヤ人の人口がかなりある大きな都市で、ユダヤ人のためにステーク部宣教師プログラムを開始することが示唆された。この書簡にあるいくつかの指示をもって、この記事の結論としてもさしつかえないだろう。

「ステーク部内の他の人々同様、ステーク部宣教師も、現在非常な論議を呼んでいる『親ユダヤ主義あるいは反ユダヤ主義』の問題に関し、いかなる形の運動をも助長することのないようここで指導することは賢明なことと考える。一般的に申し上げて、モルモンの人々は、ユダヤ人をよく理解し、また恐らく、他のいかなる人々よりも、好意的であったと考えている。全人類が兄弟であるとの概念に立てば、われわれがひとつの民として、天父のいか

なる子供たちに対しても、偏見や悪意を抱くということは、支持できないことである。そういった類の運動は必ずや誤解と議論を生じ、だれにも実質的な利益をもたらさないであろう。われわれはユダヤ人に伝えたいメッセージを携えている。彼らが耳を傾けるならば、そのメッセージを与えることにこの上ない幸福を感じるものである。

この書簡の主題に関し、われわれは宣教師たちが予言の成就の日時を推定するという愚かな試みをせめよう、この機会に注意したい。……われわれは啓示を受け入れるし、予言を信じている。しかし成就の時は、主の深遠な知恵の内にある。すべての人々が予言の成就に備えるよう教え、あとのことはすべて主にお任せするのがみこころである。」¹⁰

こうしてみると、大管長会が150年近くの間、散乱したアブラハムの子孫の集合とその聖地の回復の教義を、一貫して教えていることがわかるのである。

注

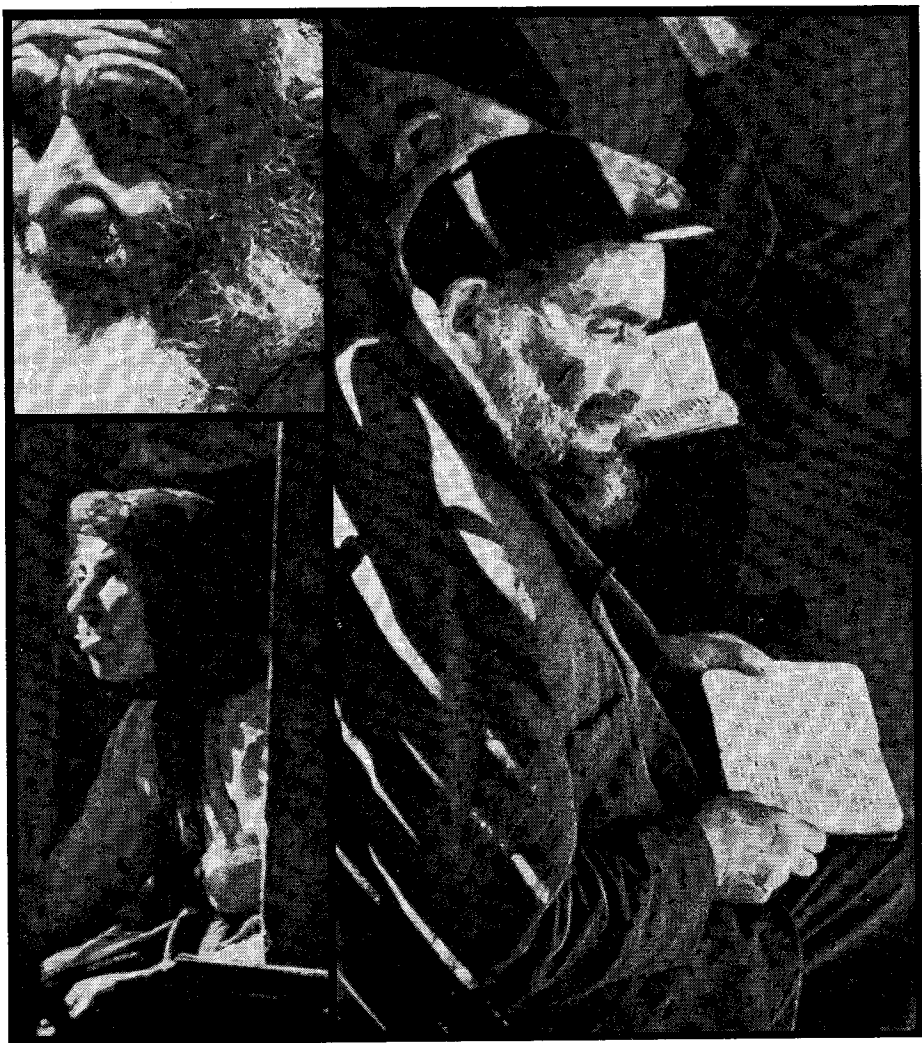
1. 「教会歴史記録」第7巻 P. 478-79
2. 同上 第1巻 P. 313. 315
3. 同上 第5巻 P. 337
4. 同上 第5巻 P. 423
5. マシアス・F・カウリー
「ウィルフォード・ウッドラフ」
P. 231-32
6. 「ミレニアル・スター」
第11巻 P. 231
7. 同上 第13巻 P. 209
8. 教会歴史事務局記録
9. 「エラ」 1921年6月号 P. 747
10. 教会歴史事務局記録

クラーク博士は、これまで何冊かの本の著作や編集にあたっている。その中には「高価なる真珠物語」、「大管長会メッセージ」がある。博士は現在、ブリガムヤング大学の古代聖典学の教授であり、シャロン東ステーク部オークヒル第1ワード部の会員である。

聖地の将来

ダニエル・H・ラドロウ

ローレル・G・コール撮影

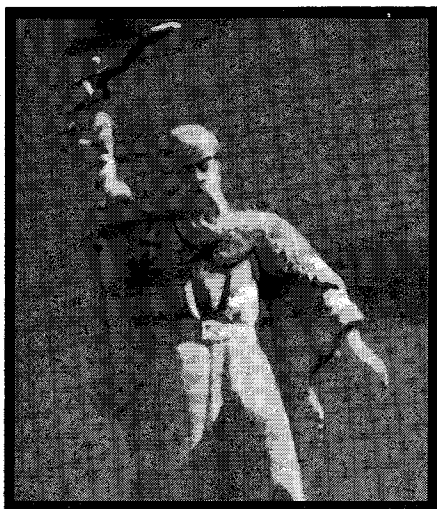


ヨーロッパ、アジア、アフリカの3大陸が接する戦略上の要所であるということから、聖地は、いつもきわめて重要な地点とみなされてきた。そして今日、ほとんどの国々の指導者をはじめ多くの人々は、この戦略的要地の将来について深い関心を寄せている。

しかし、私たち末日聖徒は、他のいかなる人々よりもその将来について多くの事柄を知っていると言えるだろう。将来について知ることのできる唯一の確かな方法は、予言のみたまによるものであり、この聖霊の賜は必ず真の教会に伴うものである。このために末日聖徒である私たちは、世が聖地について知っていることはすべて知ることができるだけでなく、靈感によって語った古代および現代の予言者の言葉により、導きを受けることもできる。

聖地の将来は、イスラエルの家の将来、特にユダの子孫の将来と全く一致している。そこで、末日のユダに関する幾つかの予言を調べれば、この地方の将来を明らかにすることができるだろう。この記事では、そのような予言を14取り上げることにする。どの予言を扱うかは、次の原則によった。

「すべての事がらは、ふたりか3人の証人の証言によって確定する」と主は言われた（Ⅱコリント13：1）。そこで、予言の出所が少なくとも2カ所ある主題についてのみ取り扱う。ま



予言者エリヤ（エライジャ）の像
ハイラム・L・アンドラス撮影

たそれらの予言は、末日に関するものでなければならない。従って、次のようなものが含まれる。(1)バビロンの捕囚後に生存し、将来のイスラエルの集合について予言した旧約の予言者の宣言。(2)救い主が地上で御業を果たしておられた間に引用されたもので、将来のできごとに関する聖句として述べられた予言。(3)現代の神権時代の予言者に啓示された予言、その他。

1. 予言者エリヤ（エライジャ）は地上に戻ってくる

バビロンの捕囚後、マラキはこう語っている。

「見よ、主の大きいなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤ（エライジャ）をあなたがたにつかわす。

彼は父の心をその子供たちに向けさ

せ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもって地を撃つことのないようにするためである。」(欽定訳マラキ4：5—6)

復活された救い主は、ニューフェイスにこの聖句を引用された。また天使モロナイは、1823年9月21日に予言者ジョセフ・スミスにこの聖句について語っている。さらにその後、1830年8月に、主はジョセフ・スミスにこの聖句を引用して語られた。これは教義と聖約27：9に記録されている。ここで文字通り幾人かの証人の口により、私たちは予言者エライジャが主の大きいなる恐るべき日の前に戻って来ることを知っているのである。

この予言は、予言者ジョセフ・スミスが記録しているように、次の示現が開かれた1836年4月3日に成就している。

「……別の雄大にして栄光ある示現突如開かれたり。すなわち、死を味わうことなく天に上げられし予言者エライジャわれらの前に立ちて曰く、

見よ、ここに於て正にその時は全く至れるなり。そは嘗てマキラの口によりて言われしことにして、すなわち主の大きいなるおそるべき日の来らん前に彼（エライジャ）遣わさるべし。

すなわちエライジャは来りて先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせん、然らずば、全地は咀いをも

て打たるべし、と言われしことを証する時なり。

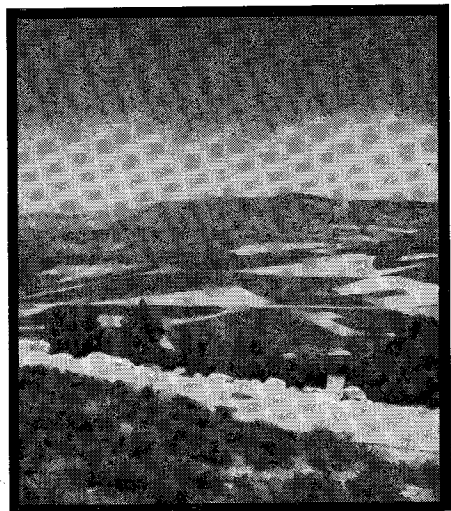
この故に、この末日の神権の時代の鍵を汝の手に委す。これによりて汝らは、主の大きいなるおそるべき日のすでに近づきて正に門口にあるを知るを得ん。」(教義と聖約110：13—16)

興味あることには、主の大きいなる恐るべき日の前にエリヤ（エライジャ）が訪れることを信じている人々がほかにもいる。しかし私の知る限り、この予言が成就したと宣言している人々は地上で末日聖徒だけである。

正統派のユダヤ人は、今なおエリヤ（エライジャ）の来訪を待ち望んでいる。そのために、聖なる記念祭では予言者エリヤ（エライジャ）のためにテーブルの椅子をひとつ空けておくのである。ユダヤ人たちが過ぎ越しの祭の時に予言者エリヤ（エライジャ）のために椅子を空けて聖地で座についていた1836年のまさにその時に、予言者エライジャ（ユダヤ人の待つエリヤ）はユダヤ人にはなく、カートランド神殿でこの神権時代の予言者ジョセフ・スミスのもとを訪れた。ユダヤ人がそのことを知ったら、この歴史上の全く意外な成り行きにあ然とするだろう。

2. ユダの子孫は地の四方から集まる

1823年9月21日に予言者ジョセフ・



最後の戦場となるハルマゲンドンの地、エズレルの平原。ダニエル・H・ラドロウ撮影
スミスのもとに現われたモロナイは、イザヤ書11章の次の節を引用した。

「主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から集められる。」(イザヤ11:12)

その集合についてゼカリヤの語っている言葉に注意をしていただきたい。

「その日には、多くの国民が主に連なって、わたしの民となる。わたしはあなたの中に住む。

あなたは万軍の主が、わたしをあなたにつかわされたことを知る。主は聖地で、ユダを自分の分として取り、エルサレムを再び選ばれるであろう。」

(ゼカリヤ2:11—12)

予言者ジョセフ・スミスは、殉教の少し前に行なった偉大な説教の中で、次のような注釈を加えてキリストの再

降臨について語っている。予言者はこれらのできごとがキリストの再降臨に先だって起こるに違いないと言っている。

「ユダは戻り、エルサレムは再建されるに違いない。神殿も再建される。水が神殿の下から湧き出て、死海の水はいやされるだろう。市の城壁と神殿が再建されるには暫く時がかかるであろう。しかし、これらはすべて、人の子が訪れる前に起こるであろう。」(「教会歴史記録」第5巻 P.337)

1841年、末日聖徒イエス・キリスト教会は、ユダヤ人の帰る地を奉獻するため聖地に使徒オルソン・ハイド長老を送った。次にあげるのはこの奉獻の祈りの一部である。

「聖なる予言者たちの予言に従いてユダの散らされた残りの子孫が集合できるよう、汝にこの地を奉じ捧げたてまつる……汝の御言葉のごとくこの地に帰る気持を彼らに起こさせたまえ。雲のごとく、また窓に集まる鳩のごとく彼らを帰らせたまえ。はるかな島々より諸国の巨大な船にて彼らを連れ戻したまえ。王たちをして彼らの育ての親たらしめ、后たちをして母の愛もて彼らの眼より悲しみの涙を拭わしめたまえ。」(「教会歴史記録」第4巻 P.456—57)

ハイド長老がその奉獻の祈りを捧げた時には、パレスチナ全土のユダヤ人

は5,000人足らずであった。ところが今日では225万人以上であり、ユダヤ人は文字通り地の四方から、すなわち100カ国以上から戻り、予言が成就しているのである。

3. ユダの子孫は地の諸国の金銀を使ってその地を回復する

ゼカリヤはまた次のように語っている。「ユダもまた、エルサレムにおいて戦う。その周囲のすべての国びとの財宝、すなわち金銀、衣服などが、はなはだ多く集められる。」(欽定訳ゼカリヤ14:14)

近代の予言者ウイルフォード・ウッドラフはこのことを具体的に次のように述べている。「……ユダヤ人の中の富んだ人々がユダの散らされた者たちを集め、エルサレム内と周囲の先祖のいしえの居住地を購入し、また聖なる都と神殿を再建するために、豊かな富を使うように求められる時がほどなく来るだろう。」(「ミレニアル・スター」第41巻, P.244)

1967年に当時イスラエルの首相であったレビ・エシコルは、ユーエスニューズ・アンド・ワールドリポート誌の記者のインタビューを受けた。その時彼は、イスラエルが合衆国のユダヤ人から10億ドル以上を受け取ったことを示唆している。また、賠償金として西ドイツから15億ドル以上を受け取って



ローレル・G・コール撮影

いることも知られている。この地を回復するために金銀が使われるという予言が文字通り成就してきたし、また現在なお成就の過程にあるのである。

4. エルサレムの地は実り豊かなところになる

末日のエルサレムの地に関するエゼキエルの言葉を引用しよう。

「そこで人々は言う、『この荒れた地は、エデンの園のようになった。荒れ、滅び、くずれた町々は、堅固になり、人の住む所となった』と。

あなたがたの周囲に残った諸国民は主なるわたしが、すれた所を建て直し荒れた野にものを植えたということを悟るようになる。主なるわたしがこれを言い、これをなすのである。」（エゼキエル36：34—36）

近代の聖典には次のように記されている。

「見よ、われはレバノン変りて豊かなる畑となり、豊かなる畑変りて森林のごとく思われる時のくるまでの間は、ごくわずかなることを世の人に教えん。」（Ⅱニーフアイ27：28）

オルソン・ハイドはエルサレムで次のような奉獻の祈りを捧げた。

「さらば主よ、汝のいつくしみたもう御子イエス・キリストの御名によりこの地の不毛を取り去りて、流水の泉を湧き上らせ、その渴ける土を潤させたまえ。葡萄とかんらんをして実り豊かにさせたまえ。またいちじくの木を栄えさせたまえ。正しき継承者によりて所有さるる時に、地を豊かな実り多きものとなしたまえ。祈りと嘆願の氣持をもて帰り来たる、放蕩の者たちを養うに足る豊かな土地に再びさせたまえ。地の上に雲が徳と富とをしたたかせ、畑が豊かに産物をいだしほは笑むようになしたまえ。羊の群れ、牛馬の群れをいや増して山や丘の上に殖やしたまえ……」（『教会歴史記録』第4巻P.457）

最近イスラエルを旅行した人は、この予言が成就して、この地方が園のようになっているのを明らかに知ることができる。

撃されるが、守られる

ゼカリヤはまたこのように述べている。

「その日には、わたしはユダの司をたきぎの中の火皿のようにし、麦束の中のたいまつのようにする。彼らは右に左に、その周囲にあるすべての民を焼き滅ぼす。しかし、エルサレムはなお、そのもとの所、すなわちエルサレムで、人の住む所となる。

その日には、わたしはエルサレムに攻めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。」（欽定訳ゼカリヤ12：69）

Ⅲニーフアイには、この点についてひとつではなくふたつの証が述べられている。なぜなら、ここで救い主は末日に関してイザヤ書を引用しておられるからである。

「されど、世の人はわが力によらず必ず汝に反抗して団結すべけれど、かくするものはみな汝のために破られて亡ぶべし。

されど汝に反抗せんとして造る武器は一つも役に立たず……」（Ⅲニーフアイ22：15, 17；イザヤ54：15, 17より救い主が引用された）

1967年6月に起こった事柄をここで詳しく振り返る必要はないだろう。当時、イスラエルは初めの地の3倍の広さを征服し、約2万700平方キロの領土を約6万7,400平方キロに広げたの

5. ユダの子孫は以前の征服者に攻

聖地の将来

である。W・クレオン・スカウセンは「空前の勝利」という題でこのできごとを本に著わしており、またライフ誌は「信じがたい勝利」と表現している。政府のある高官は、今まで企てられたものの中でも「即時の勝利」に最

も近い戦いであったと語っている。

6. エルサレムはイスラエルの統治下に入る

「……エルサレムはなお、そのもと
の所、すなわちエルサレムで、人の住

む所となる。」(ゼカリヤ12:6)

「……主は聖地で、ユダを自分の分として取り、エルサレムを再び選ば
るであろう。」(ゼカリヤ2:12)

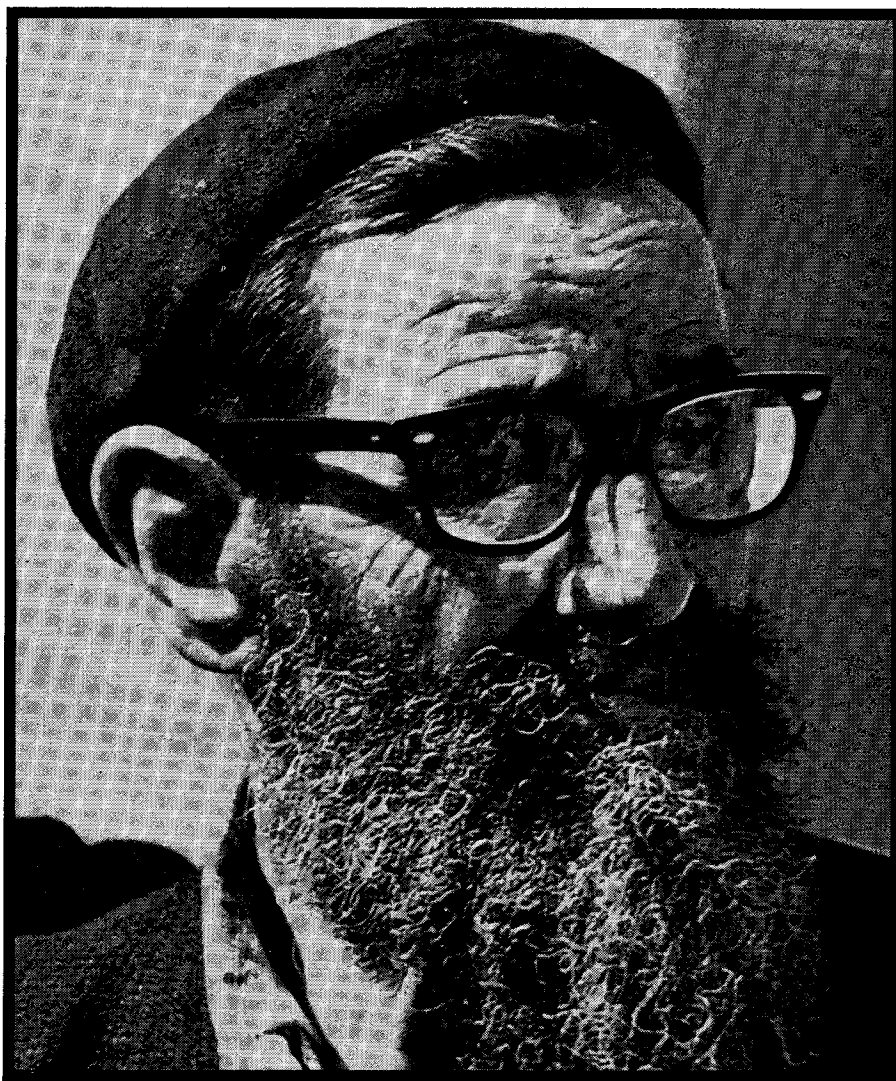
1900年以上もの間、正統派のユダヤ人は、「来年はエルサレムで」という願いで儀式的祈りを結んできた。そして1967年、すなわち1900年目の初めにその「来年はエルサレムで」という言葉がユダヤ人の間で実現したのである。

また、ユダヤ人はエルサレムが国の首都であると言っているのに対し、合衆国を始め、その他すべての国々ではイスラエルの首都はテルアビブであると言っていることは、興味あることである。テルアビブがイスラエルの首都であったのは、イスラエルがエルサレムの一部さえも完全には所有していなかった1948—49年の数カ月間だけである。そして、その後、首都はエルサレムに移された。この件をダビッド・ベングリオンは次のように説明している。

「戦争の最中……テルアビブ近郊の官庁街に一時、政庁を置かざるを得なかった。しかし、イスラエルの国には過去にも将来にもただひとつの首都しかないのである。永遠の都エルサレムがそれである……」(「祖国にもどったユダヤ人」P. 342—43)

このように世界はテルアビブでの行

ローレル・G・コール撮影



政について語るが、イスラエル人はと言えば「私たちの首都はエルサレムです」と言っているのである。

7. ユダヤ人はイエス・キリストを信じるようになり、ついには福音が宣べ伝えられるようになる

マタイによる福音書にはこのように記されている。「……この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ24:14)

救い主は、イスラエルと交わした誓約を覚えているということを、次のような言葉で述べておられる。

「而してイスラエルの家の人々にわが福音を完全なるまま宣べ伝うる時将来にあり。

その時かれらはわれを信じ、われが神の子、イエス・キリストなることを認め、わが名によりて御父に祈るに至るべし。」(Ⅲニーマイ20:30-31)

このことについて、ウイルフォード・ウッドラフは1855年に次のように語っている。「異邦人が福音を拒む時には、福音は彼らから取り上げられて、現在、地のすべての国々に広く散らされている忍耐強い民、イスラエルの家に与えられるであろう……そしてイスラエルはいにしえの都エルサレムを再建し、昔以上に栄光あるものとするで

あろう。また神の力と聖霊の賜に満たされたイスラエルのひとりの指導者を得るであろう。しかしまだ異邦人の時が満ちていないので、この業はなお先のことである。」(『説教集』第2巻 P.200)

それゆえ末日聖徒は、偉大な伝道がイスラエルで行なわれるようになって、驚くには及ばないのである。現在はふたつの大きな理由から、この国で伝道が行なわれていない。(1)私たちの教会はイスラエルで公に認められていない。(2)イスラエルには伝道を許さない法律がある。しかし時が来ると、予言者たちの言葉通りに、イエス・キリストの福音がユダヤ人に宣べ伝えられるであろう。

8. 新しい神殿がエルサレムに建てられる

ゼカリヤ8:9には次のような言葉がある。「……宮を建てるために……あなたがたの手を強くせよ。」

その神殿についてエゼキエル40-48に説明がある。また、オルソン・プラットがエルサレムの神殿について語った言葉が『説教集』第19巻 P.19-29に記されており、教義と聖約124:36-37にも記されている。ウイルフォード・ウッドラフは語った。

「……キリストはこれらの事柄が起こるまでは来られないであろう。エル

サレムが再建され、神殿が建てられなければならない。

これらの事柄は予言者たちによって明らかにされている。これらは成就するであろう。」(『ミレニアル・スター』第52巻 P.740)

またジョセフ・スミスはこう語っている。「世のいずれの時代においてもユダヤ人あるいは神の民の集合の目的は何であったのだろうか。……主な目的は、主が神殿の儀式を民に現わすことのできる宮居を主に建てて献ずることであった……」(『教会歴史記録』第5巻 P.423)

正統派のユダヤ人の多くは、第三の神殿の建設について語っている。このことに関して、ほんの数年前に、ひとつの重要な巻き物が中東で発見された。ヘブライ大学のイガール・ヤシン博士が、「神殿の書」と名付けたこの巻き物を現在翻訳しており、博士は次のような意見を述べている。

「この巻き物について驚くべきことは、神がモーセに与えられたトーラー、すなわち律法としてこれが書かれていたことである。これは全文にわたって神が1人称単数の形で語りかける形式をとって書かれている。死海で発見されるその他の巻き物はどれも、現存する聖書の写本あるいは聖書の注釈やクムラン共同体で作られた宗教文書のいずれかである。私たちの知る限り、聖

書の正典には含まれていないが、明らかに聖書の原文であると思われる巻物が初めてここに出土したのである。」

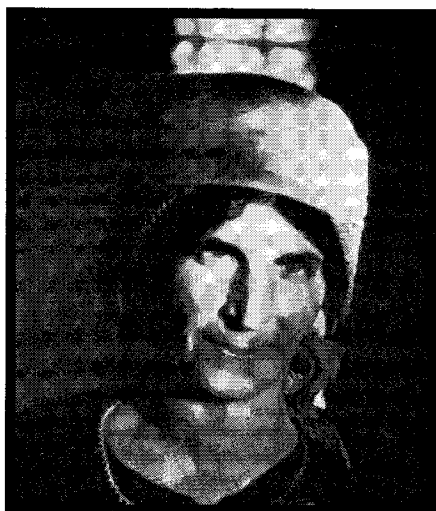
(アメリカ東洋研究学会「ニューズレター」第7号、1967年11月13日)

その原文には何が書かれているのであろうか。ひとつの大神殿の建設計画が記されており、神殿の新しい特徴が紹介されているとヤジン博士は語っている。ふたつではなく、3つのそれぞれ正確な正方形の庭を持つというのである。神殿の中庭と外庭には、各方位に3つずつの合計12の門がある。そしてそれぞれの門には、イスラエルの十二支族の名前がひとつずつ付けられている。さらにヤジン博士は述べている。

「これは大切なものである。黙示文学全体とクムランの書には、神によって定められたようにイスラエルの十二支族がひとつになるという概念が記されていた。そしてこの書でも、新約聖書で非常にひんぱんに強調されているように、十二支族のことが強調されている。」(同上)

オルソン・プラットは、末日にエルサレムに建てられる神殿のもうひとつの著しい特徴について述べている。

「エルサレムの神殿は、疑いもなくまことのメシヤを信じる人々によって建てられるであろう。その構造はある点で現在建てられている神殿とは異なっ



ローレル・G・コール撮影

たものである。主の王座が設けられるであろう。そして主は時折そこに座して、永遠にイスラエルの家を治められるであろう。」(『説教集』第19巻 P. 20)

9. ダビデ(古代のダビデ王の子孫)という名のイスラエルの偉大な新しい指導者がでる

エゼキエルはこれを予言しており、エレミヤ、イザヤ、ホセア、ゼカリヤ書にもこのことが述べられている。

予言者ジョセフ・スミスは、殉教のわずか3カ月前に次のように語った。

「……ダビデの王座と王国は彼から取り去られ、末日にその血統から出るもうひとりのダビデに与えられるであろう。」(『教会歴史記録』第6巻 P. 253)

イスラエルの王ダビデは、古代イス

ラエルの偉大な英雄であった。やがてこの名を持つ新しい指導者が出て来るであろう。

10. 地の国々はユダの子孫に抗して集合し、ユダは撃たれる

ゼカリヤ書に次のような主の言葉が引用されている。「わたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃たせる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の半ばは捕えられて行く。しかし残りの民は町から断たれることはない。」(ゼカリヤ14:2)

ウッドラフ大管長もこのテーマで語っている。「……おおユダの家よ……あなたが祖国に戻り、集まり、町と神殿を建てた後に、異邦人は軍隊を集めてあなたを攻め、えじきとし、獲物のように扱うであろう。予言者たちの言葉は成就されるからである……」(マシアス・F・カウリー「ウイルフォード・ウッドラフ」P. 509)

この予言はどのように成就されるのだろうかと思うなら、イスラエルがエルサレムを併合したために、1967年7月4日の国連総会において99対0でイスラエルに非難決議が下されたことを思い出していただきたい。20カ国が棄権し、99カ国がイスラエル非難の票を投じたのである。ただの一国もその非難に反対しなかった。そこでもし国連軍がエルサレムを奪還するために中東

に派兵されていたら、文字通り地のすべての国々が集まってユダを攻め撃つことになっていたのである。

11. ユダヤ人の国にふたりの予言者が立てられる

ジョセフ・スミスは、黙示11：2—3，6—12に述べられているふたりの予言者について、次のように説明している。

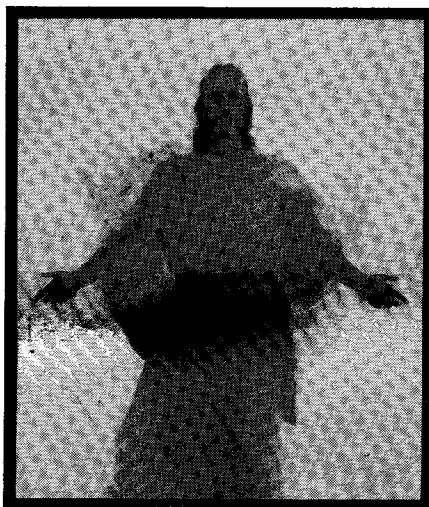
「問。黙示録第十一章に誌せる二人の証人によりて何を理解すべきか。

〔そこで主は答えられた：〕

答。そは回復の時に当り、末の世に於てユダヤ人に対して起るべき二人の予言者にして、ユダヤ人が集められて先祖の地にエルサレムの市を建てたる後ユダヤ人に予言を為すべき者なり。」

(教義と聖約77：15)

オルソン・プラットは、これらの予言者の役割について語っている。「私たちも、その時に予言するふたりの証人についてヨハネの宣言を取り上げた。彼らは3年半の間予言するであろう。その場所はエルサレムであり、それはユダヤ人によって再建された後に行なわれるであろう。彼らの予言と彼らの有する神の機能によって、エルサレムに敵対して集合する国々は寄せつけられず、これらの予言者は信仰と権能によって敵を制するであろう。しかし、やがて国々はふたりの証人に打ち



救い主、ハリー・アンダーソン画

勝つ。ふたりは使命を果たした後に殺され、その死体は3日半の間都の通りに横たえられるであろう。それから大地震が起こり、これらふたりの証人は天に取り上げられるのである。」(「説教集」第16巻，P. 329)

これに関してどのようなことが起こるかさらに詳しく知りたければ、黙示録の第11章をすべて読むとよい。

12. 救い主はユダの子孫に現われたもう

ゼカリヤはこう語っている。

「……彼らはその刺した者を見る時……彼のために嘆き……」(ゼカリヤ12：10) 救い主は教義と聖約の中で、これについてもっとはっきり述べておられる。

「それよりユダヤ人はわれを仰ぎ見

て問わん『汝の手と足にある傷は何ぞや』と。

その時、彼らはわれの主なることを知らん。そはわれ彼らに向って『この傷は、わが友の家にありて得たる傷なり。われは挙げられたる者なり。十字架につけられたるイエスなり。われはすなわち神の子なり』と言えばなり。

彼らこれを聞きて、その為したる悪事の故に泣き悲しみ、またそれより己れらの王を迫害したる故に嘆かん。」

(教義と聖約45：51—53)

ウッドラフ大管長は、この偉大なできごとについて次のように述べている「……ユダヤ人は不信のままに自分の地に集まるに違いない……そして彼らがこれをなし終えて町を再建する時にエゼキエルやエレミヤその他の予言者たちの言葉通りに、異邦人がエルサレムを攻め撃ち、略奪し、えじきとするであろう。その後、彼らがエルサレムの半分をおさえ、地上で最後の攻撃をユダヤ人に向け悩ます時、彼らの大いなる救い主シロが来られるであろう。」

(「説教集」第15巻，P. 277—78)

13. メシヤはイスラエルの民を勝利に導き、後に王の王、主の主として統治される

事実、ゼカリヤはこのことについて次のように言っている。

「その時、主は出てきて、いくさの

聖地の将来

日にみずから戦われる時のように、それらの国びとと戦われる。

主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」(ゼカリヤ14:3, 9)

教義と聖約にもこのことが述べられている。

「……主の臨在はすべてを熔す燃ゆる火の如く、水を沸き立たす熱火の如くあらん故なり。

おゝ、主よ。汝の敵に御名を知らしめんために降りたまえ。さらば万国の民ことごとく御前に戦^{おの}くべし。」(教義と聖約 133:41-42)

またウッドラフ大管長も、救い主はユダのいくさで戦われるであろうと語っている。「……しかしこの苦悩が訪れると、荒野でモーセを導かれた生ける神があなたを救われるであろう。あなたのシロが来て真中に立たれ、あなたのいくさで戦われるであろう。そしてあなたは主を知り、ユダヤ人の苦悩は終るであろう。一方、異邦人の滅亡ははなはだしく、エルサレムの回りに集まるイスラエルの全家は、敵の死者を葬るのに7カ月かかるであろう。またその武器は7年間燃料として使える。そのため、森へ行って木を切る必要はないであろう。これは恐るべき言葉である。だれがこの言葉に耐えられようか。にもかかわらず、これらは真実であり、エゼキエル、ゼカリヤ、そ

の他の予言者たちの言葉通り成就するであろう。天地は滅び行くけれども、一点一画も成就しないことはないからである。」(カウリー、P.509-10)

14. 世界の二大首都が、シオンとエルサレムに建てられる

イザヤはこのできごとを次のように予言している。(末日の予言者たちもこの聖句がこの時代に関するものであることを示しており、同じ見解が教義と聖約第133章にも見られる。)

「終りの日に次のことが起こる。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべての国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道を歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」(イザヤ2:2-3)

ジョセフ・F・スミス大管長は、これらふたつの集合地について次のように語っている。「ユダヤ人がすべての罪から洗われ、聖められた後、いにしえのエルサレムは、主が住みたもうてすべての民に御言葉を送り出したもう聖都となるのである。同じく、この〔アメリカ〕大陸にシオンの都、新エルサレムが建てられ、そこから神の律

法が出るのである。全く矛盾は存在しないであろう。なぜなら、それぞれの都が世の贖い主のための本部だからである。主は必要な時に、それぞれから宣言を寄せられる。エルサレムはユダとイスラエルの家のともがらの集合地である。またシオンはエフライムとそのともがらの集合地であり、彼らの頭上に『更に豊なる祝福』が授けられるであろう。」(「インプルーヴメント・エラ」第22巻〔1919年〕P.815-16)

末日聖徒である私たちは、ユダヤ人を含めて、地上のいかなる人々よりもイスラエルに関する予言についてよく知っていなければならない。私たちは彼らの持つものはすべて持っている。その上、モルモン経、高価なる真珠、教義と聖約の中の予言者たちの言葉もあるのである。さらに、これらの大いなるできごとについて私たちに告げることのできる生ける予言者もいて、今日私たちの教会の頭にいただいているからである。

救い主は私たちにこれらの事柄を「熱心に求め」よと勧告しておられる。聖地に関する以上の特別記事は、誓約の民に対する主の御旨について学ぶよう末日聖徒を励まし、動機づけることを目的としたものである。

ユダヤ人の 帰還

今日のお話を聞いてとても驚きました。なぜ世界中にそのことを知らせないのですか。

エルディン・リックス



オルソン・ハイド長老

エルサレムのホテルの食堂のできごとである。そのホテルに滞在しているユダヤ人の客の中で、私がただひとり外国人であったため、そのうちのひとりが、なぜイスラエルに来たのかと尋ねて来た。私はヘブライ語を研究するためであると答えた。合衆国くんだりから、彼らの国語を研究しにやって来ていると知って、ちょっとした関心が湧き上がったらしかった。話がはずんで私はこう言った。「皆さんがお聞きになると喜ばれると思いますが、私の属しているモルモン教会は、長い間ユダヤ人の集合に関心を払ってきたのですよ。」

「本当ですか？」と客のひとりが尋ねた。

「そのことをもっと話して下さい。」

「19世紀初頭―」と私は始めた。

「このモルモン教会の予言者であり、設立者でもあったジョセフ・スミスはこの時代にユダヤ人がエルサレムへ帰るであろうと予言したのです。実際、

ジョセフと共に教会を指導していた人物のひとりオルソン・ハイドが、1841年にエルサレムへ特別な使命を帯びてやってきました。ハイドはここに着くとオリブ山に登って、祈りを捧げました。私たちはその祈りをユダヤ人のための奉獻の祈りと考えています。その中で、ユダヤ人が帰還のみたまに心を動かされるよう、ここの風土と土壌が莫大な人口を維持するにやぶさかでないきよう、また、世界の各国政府が一致協力してユダヤ人の定住を可能ならしめるように祈ったのです。」

そこで講義する気など毛頭なかったが、居合わせた人々が皆食べるのをやめて、熱心に耳を傾けていたので、私は話を進めた。

「それだけではありません。もっと皆さんの興味をひくと思われるのは、ジョセフ・スミスがユダヤ人の集合を予言しただけではなく、メシアの降臨に先だって、このエルサレムに神殿が建てられるであろうと予言したことで

す。」

私はジョセフ・スミスの次の予言のことを言っていたのだった。すなわち「ユダは戻り、エルサレムは再建されるに違いない。神殿も再建される。水が神殿の下から湧き出て、死海の水はいやされるだろう。市の城壁と神殿が再建されるには暫く時がかかるであろう。しかし、これらはすべて、人の子が訪れる前に起こるであろう。」(教会歴史 第5巻 P.337)

私の話が将来の神殿に言い及ぶと、ひとりの男が驚きの表情を示した。あとで知ったのだが、その人はラビであった。

敵意をむき出しにしてこう言った。「ユダヤ人のどんな野心家だって、神殿建設の可能性を、夢にも期待していないのに。」

ちょうどその時、電話のベルが鳴りだれかが、そのラビに電話だと告げた。彼が電話の方へ席を立つ前に私は次のように言った。

「ところで、皆さんが何世紀にもわたって金曜日の夜に使ってきた祈とう書の祈りによると、ユダヤ人のエルサレム帰還と、古代の神殿の回復を祈っておられると思うのですが……」

食堂は急に水を打ったように静かになった。ようやくひとりが話し始めた。「ええ、確かにその通りです。」

それに私は答えて言った。「それでは、ジョセフ・スミスの予言と皆さんの祈りが成就し、メシアの降臨に先だって、このエルサレムに神殿の建てられる時が必ず来るように、皆さんの祈りに私も加えていただきたいと思います……。」

ひとりの婦人が言った。「私には、時々、神がユダヤ人の集合を指示されたように思える時があるんですよ。」

私はその人々に、今の婦人の言葉は正しいと確信していると言った。

あとで考えてみると、遠い国からやって来た異国人にもかかわらず、神があなたがたを助けていると話すとは、つくづく奇妙なことだと思った。本来その逆であるはずだからである。

私は1956年10月上旬にイスラエルを去った。その3週間後、エジプトのスエズ運河国有化をめぐる戦争が起こったのである。私は、フィラデルフィアのドロブシー大学で、ヘブライ語とその同族言語の研究に戻った。そしてある時、自分がエルサレムの食堂で言ったと同じことを今度は全く別の聴衆に向かって話しているのに気づいた。人類学の時間の終わり頃であった。その教授は、中東の民族習慣の著作や記事で有名な、ラファエル・ペタイ博士で

あったが、「リックス君、君のシオニズム運動の背景の研究で、ヘルツェル¹以前の最初のクリスチャンのシオニストはだれかね？」と聞いてきた。

テオドール・ヘルツェルは1897年にシオニズム運動を組織したわけだが、教授の質問は、1897年以前にクリスチャンで、ユダヤ人の帰還を唱道した最初の人物を発見できたかということであった。私は、1830年までさかのぼってひとりの人物を見つけたと答えた。

「1830年だって？」と驚いた答えが返って来た。「シオニズム運動の始まる50年以上も前じゃないか。」

「そうです。確かなことです。間違いないありません。」と私は答えた。

「一体全体、それはだれだね？」

「ジョセフ・スミスです。私の教会の設立者です。」私は答えた。

「君は、1830年という早い時期に、そのジョセフ・スミスがユダヤ人の帰還を唱えたというのかね。」

「そうです。その上、もっと興味深いことは……」私はここで自分が数週間前にエルサレムの食堂で話したことに全く同じことを反復していた。

「……1841年に、彼は教会の指導者のひとりを指名して、エルサレムへ行ってユダヤ人の帰還のためにエルサレムを奉獻するよう命じたんです。」

「その男は、行ったのかね。」

「ええ、行きましたとも。」

「その男はエルサレムへ行って、一体何をしたのかね。」

「オリブ山の頂に行き、祈りを献げました。その祈りを私たちは奉獻の

祈りと考えています。その中で彼は、風土と土壌が、ユダヤ人の莫大な人口を支えるよう、また各国政府がユダヤ人の帰還を支持して一致協力するようまた、ユダヤ人自身が帰還のみたまに動かされるように祈ったのです。」

彼は驚いて、私の級友のラビの方を向きながら言った。「それが一体、どんな影響を与えたというのかね。」

私は、それが確かに影響を与えていると答えた。

ペタイ教授は、翌春、大学を退官して、ニューヨークのヘルツェル協会で専任の研究主任となった。教授は手紙を書いてよこし、ニューヨークに来て「シオニズム運動とモルモン教会」というテーマの論文をその協会で発表するよう要請した。また私と一緒に、種々の質問に答え、私の理論を弁護してくれるふたりの相談者も招待してくれた。その招待に応じ、エリス・ラスマッセン博士と、ポール・アンドラス博士が、その企画に参加してくれた。論文は歓迎され、その後、印刷に付されて、ヘルツェル協会の年季誌の一章を飾った。(ヘルツェル年季誌「シオニストの歴史と思想の評論」第5巻P.147-74)

論文の発表の直後、ひとりのユダヤ人の紳士が、私たち3人に近寄って来て、言った。「きょうのお話を聞いてとても驚きました。ところで、あなた方は、なぜ世界中の人々にこのことを教えないのですか。」

私たちはその紳士に答えた。「私たちの教会は何十年も世界中の人々に、このメッセージを伝える努力を払ってきました。ただ世の人々が、それに

耳を傾けようとはしないのです。

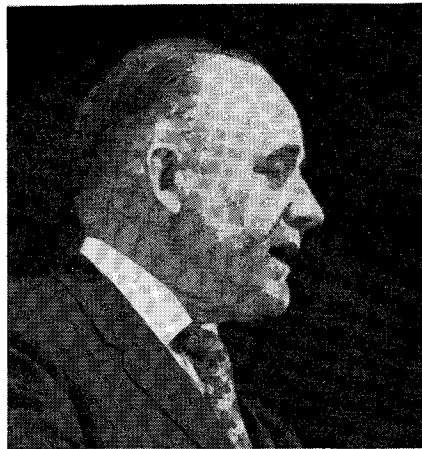
その紳士は言った。「私の言いたいのは、なぜ、何か小さなパンフレットのようなものを何億部も出版して、世界中の人にそれを配らないのかということなんです。去年のスエズ危機以来アラブ人は再びユダヤ人を海の方へ追いやりようとしています。あなた方の教会には、神がユダヤ人の帰還を命じたというメッセージがあるんですから、この危機に当たって、世界の世論のバランスをくつがえすため、大々的かつ迅速に発表したらどうですか。」

その提案に一応の謝意を表しはしたものの、私たちは、回復されたキリストの教会がユダヤ人に与えようとしている救いは、政治的なものではなく、霊的なものであることを承知していた。

こういった一連の経験から、ユダヤ人の帰還に関し、ジョセフ・スミスのとった予言者としての態度は、（この記事で紹介したのは、ごく一部にすぎない）彼が予言の賜物を持っていたことの力強い証であるという印象を強めるものとなった。そして、ユダヤ人の帰還は、予言されたイエス・キリストの再降臨の準備の一部であるがゆえに近來の現象は、主の降臨が遠からぬことを示しているのである。

1. テオドール・ヘルツェル(1860—1904)
オーストリア生まれのユダヤ人作家。

エルディン・ヘルツェルは、ドロブシー大学において中東学で博士号を取得している。現在、ブリガム・ヤング大学の古代聖典学部で教えており、学生ワード記の監督である。



十二使徒評議員会会員
ハワード・W・ハンター

教 師

最も大切な教えに接した少年時代の思い出

時計を見ると、私は準備してきた原稿をたたんで、内ポケットにしまった方がよさそうである。しかし、しばしの時をいただいて、少年時代、私の印象に残っているひとつの小さなできごとを述べさせていただきたいと思う。私たちの青年の指導に携わっている献身的な人々の一団が、この午後の集會に参加しておられることを聞いた時、私はこのできごとを思い出した。

まだ朝も早い、ある夏の日のことであつた。私は窓辺に立っていた。

ふと見ると、芝生の上にふたつの小さな生き物がいる。ひとつは親鳥であり、もうひとつは、明らかに巣から出たばかりとわかるひな鳥であつた。幸いなことに私の姿はカーテンの陰になって鳥の方からは見えない。親鳥を見ていると、芝生の上にぴょんと飛び出し、足先で地面をつつき始めた。そして、頭をぴょんと立てると、大きく太ったミミズを芝生の中からひっぱり出して、飛んで戻って来た。ひな鳥はくちばしを大きく開けたが、親鳥は自分でそのミミズを飲み込んでしまった。

ながめていると、親鳥は木の上に飛び上がり、しばらく木の皮をつついていたが、やがてその口に大きな虫をくわえて戻って来た。ひな鳥はくちばしを大きく開けたが、親鳥はその虫も飲み込んでしまった。そしてそれに抗議するやかましいさえずりが聞こえた。

そのうち親鳥は飛んで行ってしまい戻って来る気配はなかった。私は残されたひな鳥をじっと見続けた。しばらくするとそのひな鳥は芝生の上に飛び出し、足先で地面をつついていたかと思うと、頭をぴんと立てて、芝生の中から大きなミミズをひっぱり出したのである。

私たちの子供や青少年の指導に携わる立派な人々を神が祝福してくださるように、イエスの御名によりへりくだって祈るものである。アーメン。

ヒュー・B・ブラウン長老に話をする機会を与えようとの配慮から、ハンター長老は自分に割り当てられた時間を短縮した。ブラウン長老は、健康がすぐれなかったために、本大会では話をする予定が組まれていなかったのである。

証の重要性

聖霊の力は教会員を啓発し、強め、教化し、統一する

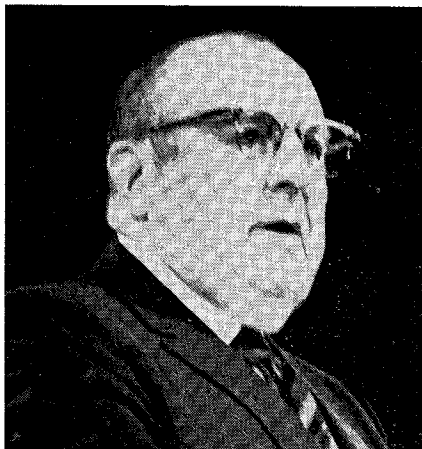
兄弟姉妹、私は本大会の中で、本日の午前と午後にわたって述べられた数々の証の力強さに非常な感銘を覚えている。スミス大管長の証はなんと堅固で力強く、かつ確固としたものだったことだろうか。だれがそれを疑いうるだろうか。次いでマーク・E・ピーターセン長老は堂々とした真実の証を述べられた。フェザーストン副監督やピーターソン副監督、またその他の兄弟たちの証は、その生活からにじみ出た、まことに謙遜で確固としたものであった。キンボール兄弟は、常に快い真実な証をされる。このような証は、私たちの生活にとって大切なものである。

福音に対する証は、教会の会員が所有する最も価値あるもののひとつである。教会の強さと一致の度合いは、会員が福音にそって生活することにより福音の真実性に気づくことにかかっている。

教会員の霊性は、福音にそって生活している度合いや、また、この偉大な御業の真実性を証する聖なるみたまを受けるにふさわしい生活をしているその度合いによって決まる。教会の繁栄よりはまた、会員が立派な行ないや、正しい生活によって示す証の強さで、ほとんどが計られる。

聖書に述べられている偉大な証のひとつは、ペテロが神殿の門前で、あしなえをいやしたあと、さばき人たちの前にひき出された時に述べた証である。

「その時、ペテロが聖霊に満たされ



十二使徒評議会補助

ジェームス・A・カリモア長老

と言った、『民の役人たち、ならびに（イスラエルの）長老たちよ、

わたしたちが、きょう、取調べを受けているのは、病人に対してした良いわざについてであり、この人がどうしていやされたかについてであるなら、あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。

このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。

この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。』（使徒4：8-12）

これに次いで偉大なキリストに対する証が、同じペテロによって次のよう

に述べられている。

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、『人々は人の子をだれと言っているか』。

彼らは言った、『ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言いまた、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります』。

そこでイエスは彼らに言われた、『それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか』。

シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。

すると、イエスは彼にむかって言われた、『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。

そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そしてわたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。

わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。』（マタイ16：13-19）

一般に他の教会が会員を失い、その会員数が減少している今日、多くの人々は末日聖徒イエス・キリスト教会の着実な発展にはどのような秘訣がある

のかと不思議がっている。

マッケイ大管長はこれに次のように答えている。「その秘訣は、教会に忠実な各人がもっている、福音は正しい原則からなるという証にある……」

「この証は、イエス・キリストの福音の原則に一致し、その儀式に従い、導き手となる神のみたま、聖霊にあずかる資格を得、またそれを受けたすべての誠実な男女にもたらされたものである。」(「幸福への道」 P.314—15)

「インパクト」(影響)誌の論説の中で、ウィリアム・E・ベレット兄弟は今日教会を導き統一している聖なるみたまの偉大な力についてよく述べている。

「今日の大きな奇跡、それは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員と、彼らを導くように任命されたあまたの幹部とを結合するみたまの働きである。なぜなら、このように指導するため任命された人々は、様々な言葉を話し、種々の人種や文化に属し、また多くの異なった土地に住んでいるからである。それでいてなお、教会の召しに従い、基本となる教義を受け入れ、生ける神の予言者によって導かれていると信じる点において、一致が示されている。

この一致は、世間では概して不可解なものに思われ、教会によく出席する多くの人でさえ理解できないでいる。この一致に影響力をもたらすのは、神の聖なる神権を通じて神の権能により人に与えられる聖霊以外の何物でもない。聖霊の働きを通じて、真理が聖書の1ページ1ページから、あるいは生ける予言者の口からはとばしり出る時に、人は真理を知るようになる。ブリガム・ヤングの言葉に『天使がいかに雄弁であっても、聖霊の力を受けない雄弁は、神が生きてましますことを、

いかなる人にも決して確信させえないし、また、真理を神の王座につかせることもできない。聖霊の力なくしては、雄弁は無用な音の結合にすぎない。人に確信を与えるものは何か。それは人の心を開き、悟りへと導く全能なる神の力である。』とある。」(「インパクト」(影響)誌1970年春季号 P.2)

すべての教会員は聖霊を伴とする資格がある。バプテスマの後頭上に手がおかれ、次のように宣言される。「聖霊を受けよ。」私たちがふさわしければ、啓示を与える聖霊を常に伴とする権利がこれによって与えられる。

聖霊を伴とするにふさわしい生活をする者への祝福が、予言者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンに啓示された。

「主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏る者に恩恵と憐みとを与え、終りまで美しく且つ真実にわれに仕うる者に誉を与うるを喜ぶ者なり。

彼らの得る報いは大きく、その栄は永遠なるべし。

われは彼らにすべての奥義、すなわち昔より今に至り、またこれより永き未来にわたるわが王国のあらゆるかくれたる奥義を知らしめ、わが王国に就けるすべてに関するわが旨を知らしめん。

誠に永遠の驚異をも彼らは知らん。またやがて起るべきこともわれ彼らに示さん。すなわち多くの代のことを彼らに示すべし。

而して、彼らの智慧は大いなるものとなりてその覚りは天に届かん。彼らの前にはすべて賢き者の智慧も滅し、慎み深き者の覚りも物の数ならず。

そはわが「みたま」によりて彼らの覚りを開き、わが能力によりてわが意の秘密を彼らに知らしむればなり。すなわち、誠に人の眼いまだ見ず、人の

耳いまだ聞かず、人の心にいまだ入らざるものをも知らしむと。」(教義と聖約76：5—10)

また主は再度予言者に言われた。

『「みたま」は世に来るあらゆる人々に光を与え、また『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。』(教義と聖約84：46)

十二使徒は救い主の特別な証し人である。十二使徒のうちどれだけの者が救い主と文字通りあいまみえたか私は知らない。彼らはそのことについては語っていない。しかし、実際にあいまみえる必要はない。その特別な証は聖霊によってもたらされるからである。

ハロルド・B・リー副管長は若い人々に向かってこう言われた。「この世にあって、救い主と顔を合わせ、あいまみえた者はそう多くはいない。しかし、あなたがたのうちだれもが、バプテスマのあと聖霊の賜を受ける祝福にあずかり、あたかも救い主とあいまみえたように、救い主の存在を完全に確信したであろう。」(「若人と教会」 P.51)

ジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長は、生活の中でのみたまによる証の力について、次のように明確に語っておられる。

「…まさしく神の御子の御姿を目のあたりにするよりはるかに強い証がもてると主は教えられた。……救い主は言われた。

『だからあなたがたに言うておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。

また人の子に対して言い逆らう者はゆるされるであろう。しかし聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない。』(マタイ12：31—32)

従って、救い主を目にすることでさえ、私たちの霊に訴える聖霊の証ほどには深い影響も心に与えないのである。ペテロとパウロのふたりは、このことを知っていた。パウロは次のように語っている。

『いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となりまた、神の良き御言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、

『そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけてさらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能である。』（ヘブル6：4—6）

スミス大管長は次のように結んでいる。「……聖霊による魂の感動は、示現によるよりもはるかに意義がある。霊から霊へと語りかけ、魂に焼きつけられたものは容易には消しがたい。すべての教会員は、イエスは神の御子であるという確信を消し去ることのないように、聖霊によって各自の靈魂に植えつけなければならない。』（「熱心に求めよ」P. 213—14）

私たちが真理を尋ね、永遠の生命を追い求めるにあたって、主は導きのないままに私たちを置いてはおかれない。主は言われた。

「オリヴァ・カウドリよ。誠にまことにわれ汝に告ぐ。……汝ある知識を受くべしと信じて信仰をもて真心より求むる如何なる事の知識をも、これを得んことは汝の神にして汝の贖い主なる主の今生きて在るが如く正に確なり。

然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。

そもそも、見よ、これは啓示の『みたま』なり。』（教義と聖約8：1—3）

福音の計画の神聖さを絶えず確かめ

るにあたり、生活の中でみたまを伴とすることがある。みたまを伴とすることを保証してくれる大切なものに、次のふたつのことがあげられる。

1. 生活が福音の標準に一致したものでなければならない。「…主の『みたま』は清くない殿に宿りたまわれない。』（ヒラマン4：24）

2. 主の御業を行なう者とならなければならない。救い主の大胆な教えを聞いたパリサイ人たちは言った。「この人は學問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう。」そこでイエスは彼らに答えて言われた。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」（ヨハネ7：15, 17）

主は予言者ジョセフ・スミスに、人がいかに主に対する証を得ることができかねるかに告げておられる。

「誠に、主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知ることあらん。

また、われは世に來るあらゆる人を照らす真の光なること…」（教義と聖約93：1—2）

私たちはあまりにもしばしば、自分でできるかぎりのことをしないうちにみたまの導きを主に願い求めている。オリヴァ・カウドリがモルモン經を翻訳しようとして失敗した時、主は次のような言葉を鍵として与えられた。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」（教義と聖約

9：8）

自分の力でできるすべてのことをなし、よく研究し、どのようにすれば問題を一層よく解決できるか決心した後、私たちはその決定を主の前にささげるのである。そこでもしそれが正しいければ、胸の中は燃え、なすべきことについて靈的な確証を得ることになる。

予言者アルマは、福音の教えについて証をし、次のように述べている。

「こればかりではない。あなたたちは私自身これらのことを知らない者であるとは思わないか。ごらん、私は自分がこれまでに話したことはみな本当であると自分で知っていることを証する。どのようにしてそれが確であることを知っているかと問うならば、

これは神の聖い『みたま』が私に示したもうたのである。私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。そこで主なる神がその聖い『みたま』によってこれを私に示したもうたので、私は自分でこれが真理であることを知っている。この聖い『みたま』とはすなわち私の中にある啓示の『みたま』である。」（アルマ5：45—46）

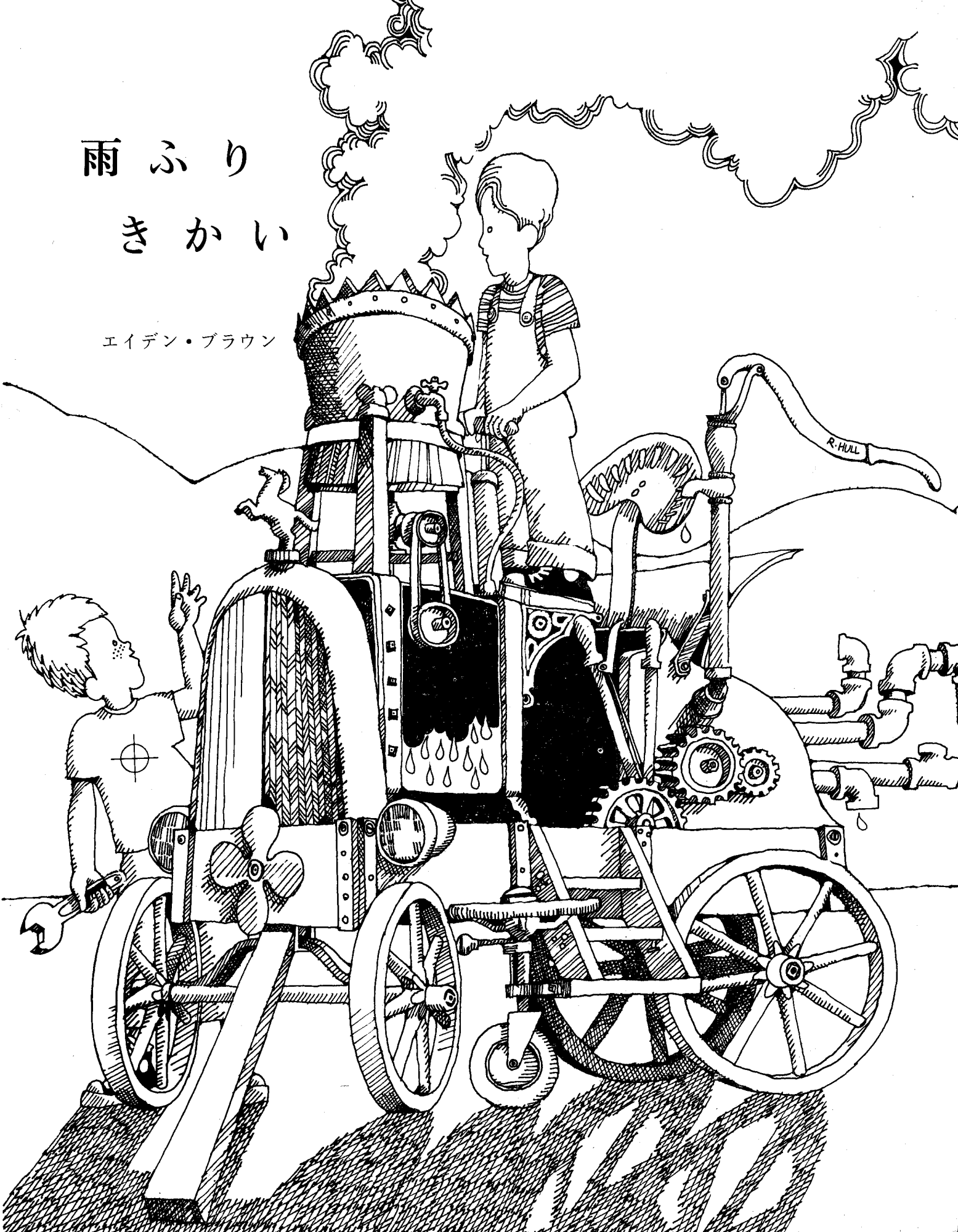
たしかに、「『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照す」のである。

私は、人はみたまの証によってこの偉大な御業の神聖さに気づくことができること、また神が生きてましまし、イエスがキリストであること、ジョセフ・スミスが神から召された予言者であり、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長も神の予言者であること、この福音は主が定められたとおり、生命と救いの偉大な計画であることを証する。兄弟、姉妹これが私自身の証であり、イエス・キリストの御名によって申し上げるものである。

雨 ふ り

き か い

エイデン・ブラウン



外に出ると、太陽がのぼりはじめていました。おんどりのクラングホーンが、はねをバタバタさせながら鳴いています。まだ夏がすぎるには2、3週間かかりそうです。

ラベンは空をぐるっと見わたしました。でも、雲はどこにも見えません。8月にはいってから、雨がぜんぜんふらないのです。このままでは、こくもつがかれてしまいます。

ラベンは、小屋から牛と馬をつれだし、水がほんの少ししかないがれていない小川にいきました。

川のむこうにペパーフィールドさんがいました。

「ペパーフィールドさん、おはよう。きょうもあつくて、からからだね。」ラベンは大きな声でいいました。

「そうだね。」ペパーフィールドさんはそういいながら、ポケットから大きな赤いハンカチをとりだして、ひたいのあせをふきました。「なんとかならないもんかなあ。こくもつはもうどうでもいいが、牛や馬のことがしんばいだ。」

「ぼくに、なにかできることがあったらいいんだけどなあ。」ラベ

ンはいろいろかんがえました。

つぎの日、朝のしごとがおわってから、ラベンはざっか屋へいきました。大のなかよしのコーニー・ストックが、ざっしを売っているたなのところに立っていました。

「やあ、コーニー、なにしてんの？」

「やあ、ラベン。本を読んでんのさ。おとうさんが遊んできてもいいっていったんだ。きみは、これからどうするんだい？」コーニーがいました。

「べつに、あっ、そうだ。村まつりのパレードにだすものをかんがえようよ。もう2日しかないんだけど、なんにもおもいつかないんだ。」

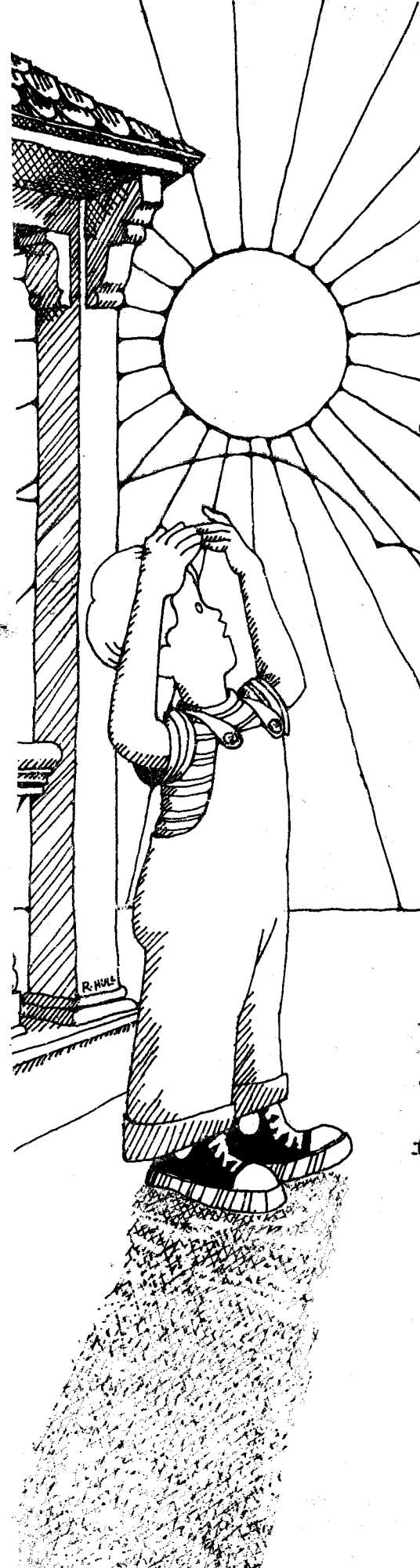
「いいよ。でも、だれもかんがえないようなものでなきや。」

たなにおいてあるざっしを見ていたラベンが、きゅうに目がかがやかせていいました。

「コーニー、いいかんがえがあるよ。雨ふりきかいを作ろう。」

「えっ、なんだって？」コーニーがききかえました。

「雨ふりきかいだよ。みんなが日でりてこまっているだろう。この



きかいは雨をふらせるきかいだっ
てみんなにはなすんだよ。きっと
びっくりするぜ。どうおもう？」
「いいね。でも、どうやって作る
んだい？」コーニーがたずねまし
た。

「なやの中をさがせば、なにかみ
つかるよ。」

ふたりは、くるまのふいふひ
んやいろいろなきかいのこわれた
ものをみつけました。その中には
ひしゃくのえのとれたものや、き
かいのベルトもありました。

ふたりはいっしょうけんめいく
みたてました。そして、つぎの日
の夜、とうとうできあがりました。

パレードの日の朝は、やはり夏
の太陽がきらきらかがやいていま
した。ふたりは、雨ふりきかいを
もって、ざっか屋の前にいきました。
ここがパレードのしゅっぱつ
点なのです。

ふたりの作ったへんてこなきか
いは、ばしゃにすえつけられまし
た。そのばしゃには、赤やみどり
ピンク、青、だいたい色、それに
金色や銀色の色紙がはってありま
した。きかいにも、たんじょう日
のパーティーでつかったモールや

テープをはりつけました。そして
きかいのりょうがわに、きれいな
字で「雨ふりきかい」とかきまし
た。

雨ふりきかいのてっぺんには、
大きなバケツがあり、その中に、
ざっか屋にとくべつにちゅうもん
したドライアイスがはいっていま
す。そして、じょう気をたくさん
だすために、中に水をいれまし
た。

さあ、しゅっぱつです。ラベン
は、ふいタイヤのポンプをおし
ました。ドライアイスのじょう気
が、いきおいよくふきでていま
す。

パレードが町の中ごろにさしか
かったとき、ラベンが空を見てい
いました。「見てごらん、コーニ
ー。」見ると、雲が、ちへい線
の上にもくもくわきあがってきて
いるではありませんか。

「ねえ、あれほんとうに雲？」ラ
ベンはうれしくなり、ありったけ
の力でポンプをおしました。じょ
う気が三がいだての家のやねまで
あがりました。

パレードがおわり、ふたりは雨
ふりきかいをばしゃからはずして
ラベンの家の小屋の前におきまし

た。それから、おまつりひろばに
もどりました。そこではパレード
でいちばんよかった人がしょうひ
んをもらうことになっています。

ひろばにいますと、雲がだんだん
空いっぱいひろがり、あたりが
くらくなってきました。ラベンは
空を見あげました。ひとつぶ、ま
たひとつぶ……

「コーニー、雨だ、！」ラベンはう
れしさのあまり、大声でさけんで
しまいました。雨つぶは、ほこり
だらけの道の上におち、きえてい
きます。ふたりは、うれしくてう
れしくてたまりませんでした。

雨はますますはげしくふってき
ました。やがてそれはひどいあら
しになり、つぎの日の朝になっ
てもやみませんでした。

それから1週間たっても天気は
よくなりず、となりの村では、ひ
ょうが15センチつもりました。
オリンパス山のちょう上には、雪
が10センチもつもりました。

それから9日たって、ペパーフ
ィールドさんからでんわがかかっ
てきました。

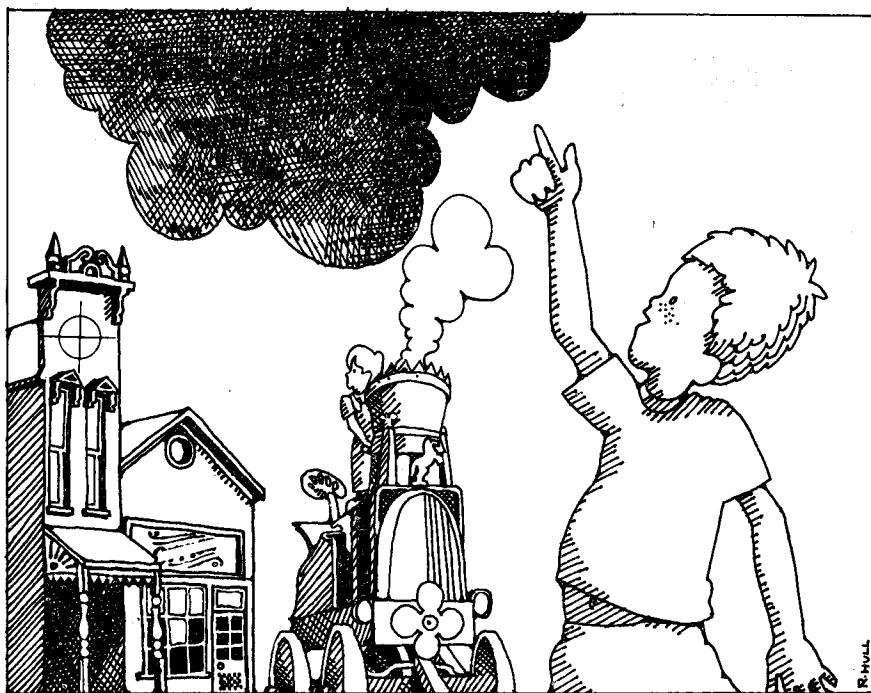
「ラベン、きみがあのきかいをこ
わさんと、大こう水になるぞ。」
ペパーフィールドさんはしんけん

にいいました。

「でもペパーフィールドさん、あ

のみにきました。

「ラベン、こわしなさい。そうす



のきかいはほんものじゃありません。あれは、がらくたで作ったんです。」ラベンはせつめいしました。「そんなこたあどうでもいい。とにかく、きみがあのきかいを作ってから、雨がふりどおしなんじゃ。いいかい、あしたの夜までこわしてしまうんだ。」

その日のゆうがた、町の人たちが雨ふりきかいをこわすようにた

ればみんながあんしんするから」とおとうさんがいいました。

つぎの日の朝、ラベンことコーニーはきかいを小屋の中に入れてこわしはじめました。ぜんぶぶんかいして小屋からでたふたりは目をまるくしました。空がまっさおにはれわたって、太陽が前のようにぎらぎらがやいているのです。

それからは、くる日もくる日も太陽がかがやき、こくもつはそだち、牛も馬も、水をたらふくのむことができました。でも、だれも雨ふりきかいのことを話す人はありませんでした。

ある日ちかくの町から、しんぶんきしゃのヒクスさんが、ラベンとコーニーをさがしに町にやってきました。ふたりはヒクスさんに雨ふりきかいのことをくわしく話しました。ヒクスさんは、ぶんかいされてばらばらになった雨ふりきかいを見て、信じられないといったようすでにこにこしながらくびをかしげました。

「ヒクスさん、ぼくらもこのきかいがほんとうに雨をふらせるなんてしんじられないんです。」ラベンはせつめいしました。

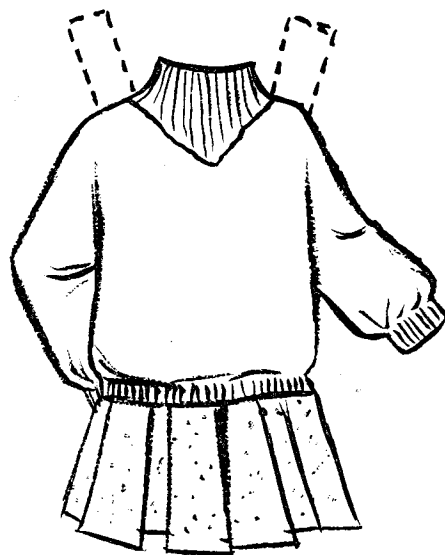
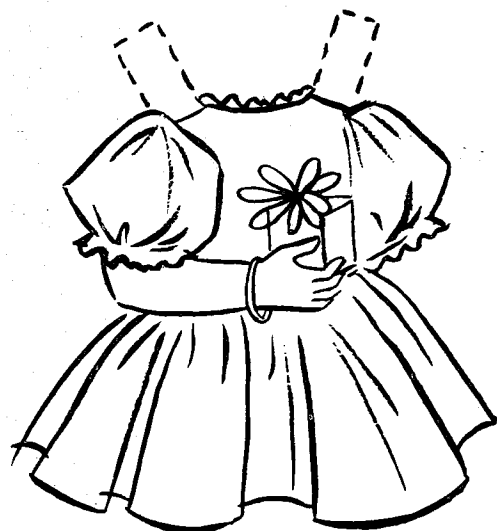
「でも、きかいは、もちほこびにべんりなようにしてとっておこうとおもうんです。」

「そうですよ。」ラベンに目くばせをしながら、コーニーがいました。

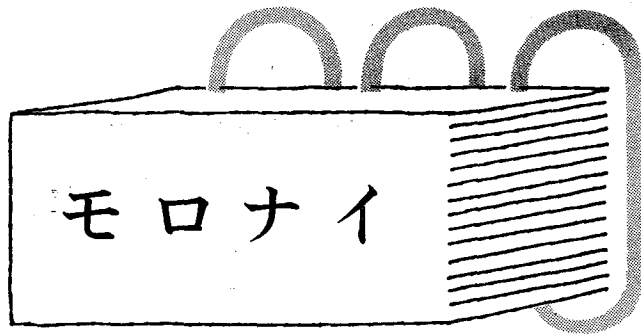
「だって、いつまたぼくたちの雨ふりきかいが雨をふらせるか、わからないでしょう。／＼」

紙にんぎょう

ビバリー・ジョンソン







マーベル・ジョーンズ・ガボットによる
モルモン経物語

絵: キャリー・カップ

モロナイは、うす暗いものかげに身をかくし、いくら明るく日が照っていても、もう外へ出て行こうとはしませんでした。もしレーマン人に見つかれば、まえに自分がひきいた1万人の勇者や、父モルモンのひきいた、やはり一万人の戦士、そしてその何十倍ものニーファイ人と同じようにきつと殺されてしまうだろうと思ったからです。ニーファイ人は、いたるところで殺され、ほろぼされていきました。

父モルモンも殺され、親ぞくもみな戦争に出て死に、モロナイには、もう友だちも身をよせるところもありませんでした。モロナイはただひとりその悲しいできごとを書きつづけました。「……レーマン人が互いに戦う戦いはまことに烈しく、またその怨みの心が強いからおよそキリストを否定しないニーファイ人は一人のこらず殺す。私モロナイは決してキリストを否定しない者であるから、私の命が安全な所を求めてさまよっている。」

夜になると、モロナイは命をつなぐために、狩りをして食べ物を与えました。モロナイには、たくさんの記録といっしょに丘にかくされている父モルモンの記録を完成させるという重大な使命があ

ったのです。

モロナイは父の記録を書き終えると、その記録をべつの金版といっしょに、とっておこうと考えました。さまざまなできごとが書かれた、たくさんの金版の中には、ニーファイ人よりも先にアメリカにわたって来たジェレドとジェレドの兄弟の家族の物語が記されている24枚の金版もありました。それは予言者イテルが記したもので、長い力強い美しい物語でした。

モロナイはよく祈り求めながら、注意深く要約し始めましたが、ジェレドの兄弟はすばらしい信仰の持ち主だったので、その言葉は大変力強くとても要約することはできませんでした。そこでモロナイは主にへりくだって、こう申しあげました。「……主はこの民に聖霊を授けてよく語らせたもうが、私たちの筆は拙いので多く書けるようになしたまわない。主はジェレドの兄弟の筆に大きな力を与えたもうが、私たちには与えたまわない。……私たちが物を書く時自分の力弱さを悟り、また言葉の用法を誤まる。……」

すると主はモロナイをなぐさめてこう言われました。「われは人を謙遜にするために人に弱点を

点 パズ ル

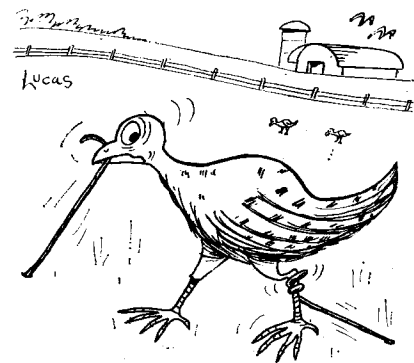
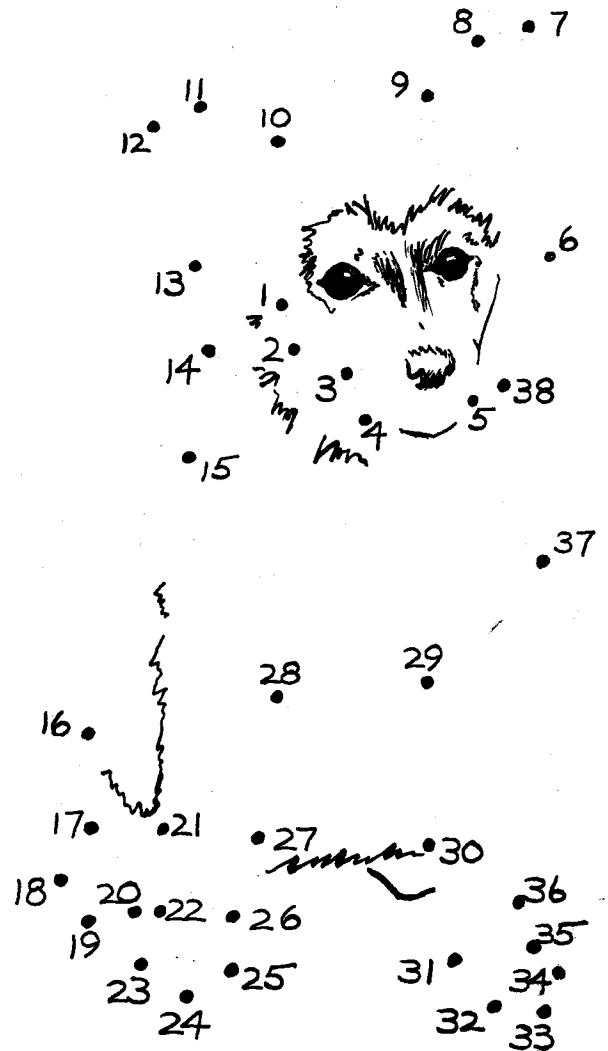
キャロル・コナー

与うれど、……また汝は己れの弱点を認むる故に力を授けらる。」そして、主はジェレドの兄弟の言葉をそのまま書き写すように、またその記録のある部分はしばらくの間封じておくようにと言われました。モロナイはその言葉に従って記録を書き、父の記録につけ加えました。そして、力をふりしぼって、父モルモンの真実と知恵にあふれた2通の手紙も書き写しました。

モロナイはひとりぼっちでした。金版を命じられたとおりに封じる前に、モロナイは金版に最後のメッセージを書きました。イエスさまの愛、教会の会員が祈りをささげ、福音について語り合うための集会、バプテスマ、聖餐式の方法、聖餐の祝福の祈りについて書きました。

また、この記録を受けるはずの今日の人々にあてて、「イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に触るのである」と前おきして、けっして、神の権能と神の賜を否定したりしてはならないことを警告し、「汝ら信仰さえあらば、わがところになう何事にも為すことを得」という約束を書き記しました。そしてさらに、「この記録を受ける時それが真実なものかどうかを……神に問え。……そして聖霊の力によって一切の事の実であるかどうかがあなたたちに解る」と書きそえました。

これは、救い主がアメリカ大陸のニーファイ人を訪れてから、400年以上もあとのことです。モロナイは、記録を次の言葉で結びました。「さて私は、……この記録を封じて隠す……さらば、すべての人たちよ。」



方針、手続きおよび

ニュース

扶助協会の基金作りについて

1970年9月11日付の大管長会の指示により、扶助協会は自主財政方式をとらず、各ワード部、支部、ステーキ部の予算から運用資金を受けることになっている。この変更は、基金作りの重荷を神権活動に負わせる（正しいことであるが）と同時に、慈善奉仕、家事技能、技術教育、文化的霊的生活の促進といった、扶助協会本来の目的のために、その時間と精力をより一層ささげることができるようにということとなされたものである。

多くの扶助協会が、予算獲得のため大規模な基金作りを行っていて、扶助協会の財政方針の変更という大管長会の意図を妨げているという報告が入っている……。

扶助協会は教会の補助組織として、他の補助組織と共に、基金作りに関して神権指導者に援助を求める。一方神権指導者は、予算作りが監督、支部長もしくはステーキ部長の指導のもとに準備して行なわれるワード部、支部、ステーキ部の責任であることを心に留めておくこと……予算の獲得は通常ワード部や支部の会員に個人的に割当てを与える方法が最も成功している。

——神権会報

聖任もしくは按手任命にあたっては、その家族の支持を求めること

家族の者を教会の責任に任命したり、兄弟を神権の職に聖任する際は、状況に応じて次のような手順を踏むよう奨励する。

妻子をワード部、ステーキ部の役職に召そうとする場合、もしくは、息子、娘を専任宣教師に推薦する場合、当該役員はそのような意図に対し家族の長の承認を得るよう話し合うとよい。

妻が教会の責任に按手任命されるときはいつも夫が同席し、夫が神権の職に按手聖任されるときはいつも妻が同席し、また子供が按手聖任もしくは按手任命されるときはいつも両親が同席するよう招請することは適切なことである。

教会の方針とプログラムは、教会員が教会内で調和した生活を送れるようにと定められたものである。これら公式の指針は、「神権会報」と呼ばれる公報によって神権指導者と補助組織指導者に伝えられており、ほとんどはこれから引用されている。またその他一般的な事項も時折掲載される。

——神権会報

系図協会の人事異動

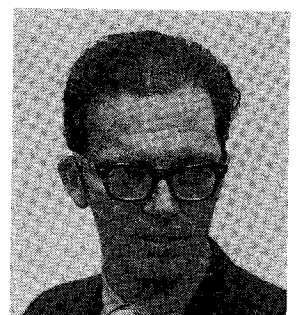
このたび、十二使徒評議員会補助のセオドア・M・バートン長老が、系図協会会長に指名された。なお前会長の十二使徒評議員会会員ハワード・W・ハンター長老は協会の理事会の一員として働くことになる。

十二使徒評議員会会員マーク・E・ピーターセン長老も、ハロルド・B・リー大管長の後任として理事会で働くことになった。

このたびの系図協会会長会の異動は、十二使徒評議員を教会の組織の細かい業務から解くという大管長会の方針を反映したものである。



セオドア・M・バートン長老



シャーマン・M・クランプ

中央アロン神権書記が召される

最近、管理監督会より、中央アロン神権書記の任命が発表された。新たにこの職に召されたのは、ソルトレーク市バトラウ西ステーキ部のシャーマン・M・クランプ部長である。「私の主な責任は、12歳以上の青少年のプログラムを相互調整することです。管理監督会はすべての若人に永遠の家族の一員となる資格を得させるという目標を定めています。つまり、若人に永遠の結婚の備えをさせ、神権を尊んで、その活動に携わるように教え、また親となる喜びを享受できるように備えることが、私たちの主に目さすところです」とクランプ部長は語っている。

伝道の奇跡

今日、宣教師を通してもたらされる犠牲・奉仕・献身の喜び

親愛なる兄弟姉妹、私はきょう話すことについて神のみたまが共にあることをへりくだり願うものである。

私は、この時代の優れた奇跡の中のひとつに末日聖徒イエス・キリスト教会の伝道の奇跡があげられると思う。

現在、教会は全世界に98の伝道部をもっている。そこでは1万5,400人の宣教師たちが彼らのすべての時間を人々を改宗させるためにささげている。これらに加えて非専任のステーク部宣教師としていろいろな職業に従事している数千人の男女がいる。これらの宣教師はお金を自分でまかなうか、友人や親戚あるいはメルケゼデク神権定員会から経済的援助を受けている。

大多数の専任宣教師は19歳から21歳の若者である。このような若者が教会のためにすべての自分の時間をささげるとは普通では考えられないことである。

これらの若者が、救い主と教会のために伝道できるのは、彼らが教育を中断し結婚を延期し、兵役に支障をきたさないようにして伝道の時期を決めているためだということを、指摘しておかねばならない。



七十人最高評議員会会員
ミルトン・R・ハンター

このように宣教師活動の奇跡は経済的援助をした人々の犠牲と自分の時間を与えたすべての宣教師によってくり返し行なわれるのである。

なぜこの宣教師の現代の奇跡が起こるのであろうか？

第一に、この広範な伝道が、1830年に回復されたイエス・キリストの真の教会に属しているという強い証を持つ宣教師と、彼らに経済的援助を与えている人々によって推進されているからである。彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会が神の聖なる神権と真実の教義と儀式、そして人々を救い主と共に日の栄に住まわすよう導く力を有する唯一の教会であることを確信してい

る。従って、彼らは、人々が福音を受け入れ、彼らと同じ喜びと祝福を分つように伝道を続けてゆくのである。

第二に、現代の広範な伝道の奇跡はいくつかの啓示においてイエス・キリストがそのように命じられたから起こるのである。例えばイエスは、教会員に次のように命じたもうた。

「汝ら全世界に出で行き、一切の生くる者に福音を説き、わが汝らに与えたる権威を以て働き、御父と、子と、聖霊の名によりてバプテスマを施すべし。

信じてバプテスマを受くる者は救われるべし、然れど信ぜざる者は救われず。」(教義と聖約68:8-9)

私が伝道部を旅行した時、たくさんの宣教師や改宗者が、珍しい経験や奇跡を報告してきた。カリフォルニアのあるステーク部長が次のような宣教師の経験を話した。

彼のステーク部に裕福な家庭で育ったひとりの若者がいて、彼はずっと宣教師から福音を学んでいた。しかし彼の教会に対する興味は彼の両親にとって不快なものだった。両親は彼を教会に出席させまいとしたが、彼はこれが

真のイエス・キリストの教会であり、自分も加わらなければならない、という強い証を述べた。そこで彼の両親は大いに腹を立て、もしモルモン教会の会員になるならば勘当すると彼に言ったのである。この通告にもかかわらず彼は会員になり、両親はほんとうに彼を追いついてしまった。

彼はモルモンの家族に招かれて、そこに住むようになった。そして監督とステーク部長は彼に伝道に出るように求めた。彼はその召しを受け入れた。しかし、出発する前に、彼の両親は息子の知人を通して息子が伝道に行こうとしていることを聞いた。彼らは息子に、もし伝道するならば二度と連絡しないし、お金も送らないと伝えた。それで彼は両親との連絡を断った。

約1年後、その若者が伝道部にいた時、ステーク部長に午前1時頃電話がかかってきた。優しい婦人の声で、宣教師である息子に金を送りたいのだが住所を教えてはくれないだろうかと尋ねた。このようにして、母の愛は宗教的偏見を超越したのである。

また、ある伝道部を旅行している間に、私は全米大学バスケットボールの花形選手に会った。大学を卒業して、彼は高収入のプロ・バスケットボールチームとの契約を断わり、伝道に出たのである。

また、別の宣教師は、高等学校を卒業する時、プロ野球選手として年3万ドルで申し込まれたそうである。しかし、彼は申し出を断わって伝道に出た。

その若者が、伝道か高収入のプロか選択を迫られた時、伝道を選ぶには非常な信仰と献身を要したであろう。しかし、多くの末日聖徒はこの選択を行っている。

最近、南アメリカで、ある姉妹宣教師から彼女の末日聖徒イエス・キリスト教会への改宗と宣教師の召しについての話を聞いて、私は非常に感動させられた。伝道に来る前、彼女は看護婦だった。そしてルームメイトはモルモンの姉妹だった。彼女はルームメイトの生活態度や、性格、個性が気に入っていた。そこで彼女はこの教会の教えを勉強する決心をしたのである。そのモルモンの姉妹は彼女に福音を教えるためにふたりの宣教師を呼んだ。

彼女の両親は、彼女がこの教会の教えに傾倒しているのを聞いて、徹底的に反対した。そして教会に入ることを禁じ、もし加わったならば勘当すると告げた。

聖霊は彼女にイエス・キリスト教会が真実であるという強い証を述べたので、彼女をとっても愛していた両親の願いにもかかわらず、彼女はバプテスマを受けることを望んだ。

両親から家に帰って来ないように言われた時の彼女の悲しみはどれほどだったであろうか。

教会員になってから、彼女は伝道に出ることを強く望んだので、働いてお金をためる決心をした。約3,000ドルためるために、3、4年かかった。彼女は南アメリカに召され、そこで今、土地の人々にイエス・キリストの福音

を教えるという素晴らしい仕事をしている。家に帰った時に、両親の愛と好意を取り戻すことができるように彼女は望んでいる。

何年前か、伝道部を見終えてから、私は友人のひとりに「ある町であなたは改宗者を得ることができましたか。」と尋ねて、その町の名前を言った。

彼は「いいえ、そこではひとりも改宗できませんでした。同僚と私は、その町ではほとんど伝道できませんでした」と答えた。

私は、最近その町で集会を開いたことを彼に告げた。集会の後で、ある婦人が伝道部長と私に近寄ってきて話した。「私が子供の頃、ふたりのモルモン宣教師が何度も私の家に来て母と話していました。

宣教師が来るたびに私は台所に駆け込み、たいして興味を持っていなかった母とその宣教師が話している間、扉のうしろからそっとのぞいて話を聞いていました。

彼らが去ってから、すぐに私は居間に駆け込み、彼らが机の上に置いていた印刷物を取り上げ、部屋に持ち込んで研究しました。勉強するのが楽しくて仕方ありませんでした。

ついに私はモルモン経を手に入れ、読んでみました。私は、これは真の教会であるという強い確信を持ち、完全にイエス・キリスト教会に改宗するようになりました。成人してから別のモルモンの宣教師がふたり、町にやって来たので、私は彼らにバプテスマを施してくれるように願いました。教会員

になってからは友人や親戚に福音を教えました。この支部には、私のバプテスマを契機として教会員になった人が、50人以上もいます。」

そこで、私は友人に言った。「わかりでしょう。あなたとあなたの同僚は、ひとりも改宗者を得なかったどころか、その町で間接的に50名以上もの人々を改宗させていたのですよ。」

ある宣教師は、神が真理を求める人を真実の教会にいかにも導くかを、経験から話してくれた。

同僚とある家の扉をノックした時のことである。ひとりの婦人がすぐに戸を開け、彼らを迎え入れ「あなた方宣教師は、きょう、私の祈りに答えるために来たのです」と言った。

「長い間、私は、自分の属している教会に満足することができませんでした。それは、キリストが地上におられた間に教えられた、多くの教義を含んでいないと感じていたからなのです。救い主によって建てられた教会ではないと思っていました。私は、一生懸命に天のお父様に、だれか救いに関する真の福音をもたらし、真の教会に導いてくれる人を送って下さるように祈り求めました。

そうしたある日のこと、私は夢を見ました。ふたりの宣教師が尋ねて来て中に入ると『私たちはイエス・キリストの真の福音をあなたに持って来ました』と言ったのです。あなた方は私が夢の中で見たふたりと同じです。それにあなたは、『イエス・キリストの真の福音をあなたに持って来ました』と

言いましたね。私は、あなたが私たちの主の僕であり、主の福音を教えてください、ということを知っています。」

ふたりの宣教師はその歓迎に驚いたが、このすばらしい婦人に福音を教える特権を感謝した。彼女は熱心にレッスンを受け、すぐに末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となった。このようにして、もうひとつの伝道の奇跡が起こったのである。

伝道部長夫妻、それに家族の信仰と献身が犠牲と奉仕のすばらしい話を生み、それがイエス・キリストの福音を広め、王国を建てるのである。

大管長は神の聖なる予言者として、ひとりの兄弟とその妻を、伝道部を管理させるために召す。召される人の職業上の立場も経済的な状況も考慮しないが召される人はそれを引き受ける。自己の利益は度外視して、3年間、伝道部を管理するようにという大管長会を通して来る神の召しを忠実に受けるのである。

ひとりびとりの伝道部長の召し、そして彼の顕著な経験とその召しを受ける信仰心、経済的なことを調整して家族のために社会生活を再び取り戻すところこそ現代の宣教師の奇跡である。

例えば、最近、ある伝道部の伝道部長と気軽に話した時、彼はこんなことを言っていた。大管長会から召しを受けた時、彼は雇用主に休暇の許可を求めた。あと3年もすれば、家族を一生支えるのに十分な額を、会社から保障されるはずだったのである。

教会員ではなく、伝道に行くことに

反対の雇用主は、休暇の許可を与えなかった。そのうえ、もし召しを受けるならば会社から受けられる経済的利益を失うとの通告を受けたのである。この大きな経済的犠牲にもかかわらず彼は召しを受け、そして今、忠実に、教会と神に仕えている。

私は伝道部長に尋ねた。「大管長会に伝道に行けば経済的損失を受けるようになることを話して、3年間、召しを延期してもらってはいかがでしたか。」

彼は答えた。「3年後に神は私をお召しにはならなかったでしょう。神は今私を召して下さいました。私と妻は神の召しに従う決心をしました。経済的なことは、後で助けて下さると信じています。」

教会員としての奉仕に伴うそのような犠牲は、確かに途方もないことである。まさに現代の宣教師の奇跡である。

終りに、私の証を伝えたいと思う。真のイエス・キリストの教会は、救い主と、他の御使いたちから予言者ジョセフ・スミスによって、地上に回復されたのである。この教会の会員であることと、その中で啓示された教えに従って生きることは、神に帰る唯一の道である。この教会は、人類が天父と御子の御前で永遠の生命を得るために、従わなくてはならない道を示しているのである。

イエス・キリストの御名により、アーメン。

神との交わりを強くしよう

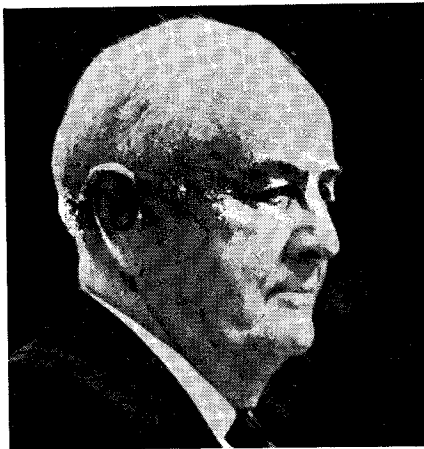
神との交わりを断つことにより、いかに罪、あやまち、不幸へと導かれてしまうか

愛する兄弟姉妹。皆さんの前に立ち永遠の福音について述べ、教会の神聖さと主の御業の神聖さ、また予言者と主の指導者たちの神聖さを証するとき、いつも心におののきを覚え、同時に喜びを感じるものである。

まことに残念なことに、リチャード・エバンズ兄弟はこの世を去って、前回の大会以来、私たちは彼の姿を失った。今、十二使徒評議員会の12番目の会員として、雄々しいアシュトン兄弟を迎えた。またピーターソン兄弟とフェザーストン兄弟を教会幹部に心から迎え入れたい。この両人と、また新しい役職についたバンデンバーク監督と共に働けるのは喜ばしいことである。

今週は復活祭にあたっている。この時期になると、私たちはお互いに、エルサレムの城壁の外にある、小さな庭の岩をくり抜いた墓の中で起きた空前のできごとを厳粛な気持で思い出す。それは早朝に起きたことであり、この話を聞くすべての者に驚きを与えるものであった。

そのことは、それまで地上では一度も起きたことがなかったので、人々はなかなか信じられなかったであろう。しかし、復活された主御自身が人々の前においでになり、御自身を現わされその傷ついた手足に触れてみた時、もはやそれ以上疑うことができたであろうか。キリストを信じていた近い間



十二使徒評議員会会長代理(現会長)
スペンサー・W・キンボール

柄のあまたの人々は証をした。

これこそナザレのイエスであって、馬小屋にお生まれになり、小さな村で成育され、ヨルダン川でバプテスマを受けられ、ゴルゴダの丘で十字架にかけられ、がけをくり抜いた冷たい部屋に葬られ、墓のかたわらの小さな美しい庭で復活を証拠だてられたお方なのである。

私たちがキリストの戒めに沿って生活しないかぎり、十字架にかけられる前にまた十字架上で苦しまれたこと、それにその偉大な犠牲はほとんど、いや全くと言っていいほど意味がなくなってくる。なぜならキリストはこう言われたからである。

「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」(ルカ6:46)

「もしあなたがわたしを愛するなら

ば、わたしのいましめを守るべきである」(ヨハネ14:15)

確かに私たちが教えに沿って生きようとしなければ、キリストとの交わりは失われてしまうだろう。

ある時南米で、この交わりを断たれた例を見た。

私たちはアルゼンチンのはるか北西部を車で旅していた。そこは牛の多いなかで何マイルもまっすぐで狭い道が続いていた。道の両側には4本の針金がかけられたフェンスが立っていてフェンスと平行して、世界中に通じる通信線がかけられた電柱が続いていた。各電柱にはクロスバー(電柱の上部に電線をひくのに、金具でとめるためにわたしてある横木)がとりつけてあって、そのクロスバーからクロスバーへと通信線がひかれていた。

車を走らせていると、焼け野原に出た。以前は草が一面にのびていたところに違いない。見ると、地面の近くで燃えきって出火の跡をとどめている電柱が何本か目にとまった。だれかが不注意に車から火のついたタバコを捨てそれが草に点火し、電柱に燃え移ったのだろう。そのために電話連絡がとどえ、通信能力は落ちてしまっていた。

遠方の電柱もほとんどこげているか燃えてしまっていた。あるものは、地面から数10センチの高さまで焼けてなくなり、上部を電線に支えられて宙づりになっていた。空中でぶらぶらして

いるたんだ電線でつられたように立っている電柱は、風の中で揺れながら地面に触れ、そのたびごとに電線に静電気が起きていた。

電柱はもともと電線をはるために立てられたものだが、ここでは、傾いてしまっていた。

この電柱と電線には、人間関係とやや似たものがあるのではないかと私は考えた。電柱はひとつの目的のためにまた時おり他に役立てるため立てられるものである。しかも、しっかりとしがんじょうで、電線を支えられるように設計されるが、多くの場合、完全に切られてしまうのでなければ通信能力が非常に落ちるまで傾いたり、ぶらぶら揺れたりしながら立っている。

私は自分の経験から、夫婦の問題の多くが、意思疎通の欠如からくることを知った。すなわち、あたかも電線がたれ下がり、電柱が燃えてしまっているように、夫婦は互いに騒々しく口論し合い、平和のあるべきところに静電気が起きているのである。愛と一致のあるべきところに、反感と憎しみがつのっている。

これについて、永遠の結婚をしてからまだ数年しか情熱的な期間を過ぎていない若い夫婦が、互いに離婚しようとしている典型的な例がある。ふたりの人生に対する考えは、（他の多くの人と同様に）霊的なことについて異なっていた。一方は、相手が狂信的だと考えるようなことに沿って行動したいと望み、反対に、もう一方は、相手がほとんど背教的だと思うような線に沿って行動したいと望んだ。双方とも間違っていたのである。

ふたりはその点について、話し合っては互いに腹をたて、次第に共通の目標から離れていった。ふたりともともと善良な人であったのだが、燃えてない電柱ともつれていない電線、（今はそれがたるんでしまっているが）が必要であった。理性的に意思を通じ合う能力の無さが、怒り、激しい言葉、

誤解を生んだのである。

そして遂には互いに別の人を見つけ同情や理解、また慰めを求めて、異なった意思疎通の線を設けてしまった。そしてこの不実な行為は肉体関係へと発展し、姦淫を犯してふたつの家庭を破壊し、互いに幻滅感を与え、希望を粉々にし、子供を傷つけてしまったのである。

このことはすべて、このもともと善良なふたりが、互いに通信線をたるませ、安全な電柱を地面の上でひきずってしまったからである。このことは、この一組の若夫婦だけではなく、栄光の光のうちに、幸福に満たされて、互いに責任を感じながら、最高の希望に胸ふくらませて結婚生活を始めた数多くの夫婦に起こっていることなのである。

ある日曜日、遠方でのステーキ部大会に出席したおり、大会が終ると、どこかで見たことのあるひとりの若い男性が近づいてきた。その男性は、帰還宣教師で、数年前伝道地で私に会ったことがあると自分を紹介した。彼は大会に出席できず、閉会の時に着いたので、私に挨拶をしたかったのだと語った。互いに楽しい気持ちで挨拶し、幾人かのすばらしい会員の思い出話がでた。私はその男性自身のことを尋ねてみた。彼は大学に行っていて、まだ独身であり、かなりみじめな思いをしていた。

私は彼に教会内で何をしているか尋ねると、彼の目は輝きを失って、にぶくなってしまい、顔には失望の色を浮かべてこう言った。「今、私は教会では活発じゃないんです。伝道していた時によく感じたものと同じものが感じられないのです。証は何か錯覚だったのではないかと考えることがよくあります。神がおられるのかどうかももう確かではありません。私のかつての情熱と喜びは間違っていたのに違いありません。」

私はじっと彼をみつめてから、いく

つかのことを尋ねた。「余暇に何をしていますか。」「どんな本を読んでいますか。」「どの程度祈っていますか。」「どんな活動をしていますか。」「どんな人ときあっていますか。」

答えは私が予期したようなものだった。その男性は、福音である鉄の棒から離れかけていたのである。不信心な人々と広く交わっていた。大学の教科書に加えて、無神論者や背教者、また聖書批判家が書いたものを読んでいた。天父に祈るのをやめていた。その男性の電柱は燃えてなくなっており、通信線は恐ろしいほどにたるんでしまっていた。私はそこで尋ねた。「伝道が終ってから何回新約聖書を読みましたか。」

「ちっとも」これが答えだった。

「何度モルモン経典を通して読んできましたか」

答えは、「少しも読んでいません」であった。

「聖典を何章読みましたか。何節読みましたか」

彼は一度も聖典を開いていなかった。信仰を否定し、批判し、打ちこわしてしまうものを読みながら、なぜ楽しくないでいるのか不思議に思っていたのである。

もう祈りもささげないでいるのに、どうしてつらいこの世の中にひとり見捨てられているような気持ちになるのかわからないでいたのである。長いこと主の聖餐にあずかっていないのに、なぜ自分の魂が死んでしまったのかわからずにいたのである。

1セントも什分の一を納めないでいるのに、なぜ天の窓が閉じられ、鍵がかけられ、ふさがれてしまったのかわからずにいたのである。この男性は、受けることができたはずのすべてのものを受け取らないでいた。彼が、哀れな自分、消えかかった信仰、孤独、そして自分の失敗を考えている時に、私は、アルゼンチンの北西で見た、焼けた草原や燃えてしまった電柱、たるんだ電

線や、地面の上で揺れている電柱のことを思い出していた。

今日、私たちが大いに心配するのは信仰衰退のきざしが見られることである。マッチが落とされ、草が燃えている。

精神的な罪の意識が薄れてきているのは、恐ろしいことである。雇用されている者の間では、自分の職務への意欲が低下していて、利己心や欲求心、かけひきなどに追われている。「どの位収入があるのか」、「どの位昇給するのか」休日の増加、労働時間の短縮などにのみ関心が寄せられている。雇用者側の意欲も低下している。

私たちはあまりにも豊かになりすぎている。お金その他のものに余りにも恵まれすぎている。多くのものを所有している。貧しいといわれる多くの人でさえ、物を豊富に持っており、「物質」の追求が生活のすべてになっている。

しかし主は言っておられる。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6:33)この主の御言葉にもかかわらず私たちはあまりにもしばしば、第一に「この世の物」を求めている。

すばらしい若い世代の人たちがいる。だが多くの若者と語る時、彼らの間で特に罪を犯している者が、祈りを忘れかけてしまっているのに驚く。多くの者がほとんど祈らなくなっている。彼らの通信線はたれ下がってしまっている。また多くの若い夫婦は、結婚の初期に、定期的に祈るのをやめてしまっている。彼らの通信線もたるんでしまっている。

問題のある人にまず第一に尋ねることは、「祈っていますか。どの位熱心に祈っていますか。また祈る時、謙遜な気持ちで感謝をささげていますか。それともただ願いを求めていますか。」

昔イスラエルに深刻な問題があった。水飢饉に見舞われて、牽引用の牛

馬を養うのに大変であった。

イスラエルの王アハブは予言者エライジャ(旧約のエリヤ)に詰問した。

「イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいますか」

彼は答えた、「わたしがイスラエルを悩ますではありません。あなたとあなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです。」(列王紀上18:17-18)

カルメル山上で予言者エライジャと少しも力のあらわれないバアルの神の間にせ予言者との間で繰り広げられた壮観なドラマは、あたかもたるんだ通信線の話のようである。大きな罪悪があったので、主は天からの雨をとめられたのであった。エライジャは言った。「……主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならば、それに従いなさい。……」(列王紀上18:21)

エライジャがこの競演をもちだしたのは、イスラエル人に石や木、金属で作られた神には力がないことを立証するためであった。450人のバアルの祭司たちは、彼らの信ずる神々をしてささげものに火を点じさせることができなかったが、主はエライジャを通じ、天から火をふらせたまい。祭壇上の牛を焼きつくされたのである。イスラエル人の間には信仰がよみがえり、その信仰により雲がわき、滝のように雨が降った。信仰の弱かったイスラエル人は、新しい電柱を打ちたてたのである。通信線をひきなおし、そこで通信神との交わりがふたたび打ちたてられた。

北西部から二組の若い男女がやってきて悲しみながら頭をたれた。一方の夫婦のうちの夫と、別の夫婦の妻が、どんな交際にあっても黙認されてはならない慰めを互いの中に見だし、それぞれの伴侶に不実を犯し、自分をどうすることもできずに道を踏みはずしてしまったのだ。ふたりの問題は頂点に達し、その結果悲しみが訪れたので

ある。

このような問題のたどる経過はみな同じである。互いの伴侶に不誠実になったふたりの若い男女が、しばしば言葉を変えようになり、過度に信頼しあう。次いで人知れず会うようになり互いの伴侶への不実があからさまになる。そして遂には全く夢想だにもなかったであろう肉体の関係へと進むのである。

この二組の男女は不活発になり、教会へ足を向けるのも不規則になった。彼らは、同じように霊的に怠情になった人々の社交グループに加わった。彼らの新しい生活は収入以上のものを必要とし、借金は什分の一の納入を不可能にしてしまった。

「家庭の夕べ」をするのに余りに忙しくなりすぎ、家族の祈りも落ち着いてできなくなり、大きな誘惑がやってきたとき、もはやそれに対する備えがなかったのである。彼らの信仰の草は焼き払われ、その火勢は電柱を焼きつくし、燃え残った部分は、たるんだ電線をぶらぶらさせてしまった。

神との通信線がたれ下がる時、いつも、おそかれ早かれ罪がやってくる。

私たちは通信線のたるんだ世界に今日生きている。カインがサタンにそそのかされて以来、この世に罪があったが、今日ほどに、生活全般に罪がはびこっている時は今までになかった。私たちにはこの壇上からそして幾千もの他の説教壇から、悔改めを叫び続けなければならない。世のすべての人々にもし今のまま進むなら、その報いを受けなければならないことを警告し続けるべきである。

私たちが常に自分のたるんだ通信線を修理し、自分のすべての義務を果たし、主すなわち救い主に近くあることができるよう、イエス・キリストの御名によって祈るものである。アーメン。

「人をさばくな。自分が さばかれないためである」

他人に誠実であり、うわさ話、悪口は避けるべきである

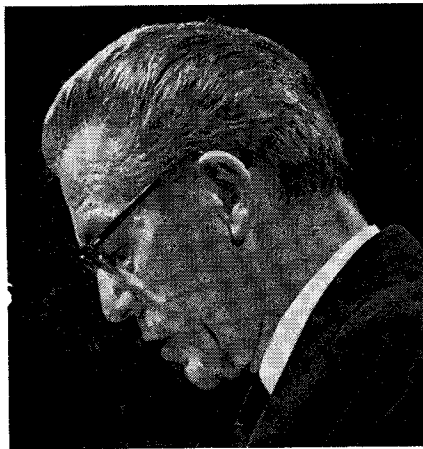
先日私はある人がだれかを非難しているのを耳にしたが、その時次の言葉が心に浮かんできた。

「会う人ごとに、『あなたの長所がわかります。だから我々の良い点も見てください』というなら、この世はもっとすばらしくなるだろう。」

人が友人や隣人のことを取りざたし、外見上風変わりに見えたり、愚かに見えたりする点を中傷するのはごくありきたりのこととして行なわれているように思われる。事実、人のうわさをし、人をさばくのを当然のことと考えるのが一般の風潮である。ところが、特異な個性のゆえに非難され、さばかれ、あざけられた若者が、それに負けないでついには努力の末に違った分野で指導者になった話をきくことがよくある。

正当でない批判や、事実に基づかない判断について、例を 1, 2 あげてみよう。

デビッド・O・マッケイ大管長の夫人マッケイ姉妹が、学校で教え始めたばかりの時のことである。校長がマッケイ姉妹を生徒に紹介した時、ひとりの男の子を指さして、あの子は問題児なのだと語った。マッケイ姉妹はこの少年が気を悪くしたことにいち早く気



第一副管長

N・エルドン・タナー

づき、彼がこのままでは評判通りの少年で終始するのではないかと心配した。それで次のように紙きれに走り書きして、その少年の机のそばを通り過ぎる時に、机の上にそっと落としたのである。「アール、校長先生は間違っていると思います。あなたは悪い子ではありません。私はあなたを信頼しています。このへやを学校中で一番良いへやにするのを手伝ってくれますね。」アールは学識豊かな人物になったばかりか、町でも屈指の重要人物になったのである。

もうひとつ例を話したいと思う。社会に深い関心を寄せ、人々の尊敬を広く勝ち得ていたある人が、心に深い傷を受けた人のように振舞い始め、以前にはよく行って活発に活躍していた場所へ足を向けなくなった。人々はその

人を怒りっぽくスポーツべたの人づきあいの悪い奴だと非難し始めた。できるなら彼を避けようと思えるようになった。ところが後日、医者の診断によると、その人は脳腫瘍をわずらっていて、そのために以前にはよく参加し時には主催さえした活動に興味を失っていたことがわかったのである。

不正な判断とも言える例を 1, 2 話してみよう。最初に、ある監督はワード部に役員を補充する必要が出て、ひとりの会員のことを思いついた。その人は活発ではないが能力があると思われた。しかし監督はこう思った。「いや、あの人は興味を示さないだろう。責任をひき受けたいなどとは思ってもいないだろう。」そう思って監督はその人に近づけなかった。それでその人は何年間か不活発であった。

新しい監督が召され、その不活発な会員に会って、喜んで責任を受けてくれるかどうか尋ねた。監督はその会員に充分受ける用意ができていて、責任が欲しいと思っていることを知った。

前もってさばくことは避け、人々に機会を与えよう。受け入れるか辞退するかは、本人に決めさせよう。

そうかと思うと、ある人が、家族や他人に「どうして監督はあんなことをするのだろう、私にはわからない。監督はもっとよくできた人だと思ったん

だけれどなあ」などと言っているのを耳にする。この人は、事実を知らないで監督をさばいている。もし事実を知っていたら、監督の**とった措置が全く正しかったことがわかる**だろう。この人の非難は不当であるばかりでなく、きつと子供たちにも偏見をもたせ、監督への尊敬を失わせた上、信仰までも弱めてしまうだろう。

以上の例は、人をさばかないようにすることがいかに大事で、非難するよりもむしろ励ますことが大切であることを示している。2,000年も前にイエス・キリストは、人が正しくない非難をしがちなことに気づいて、次のように言われた。

「人をさばくな。自分がさばかれな

いたためである。
あなたがたをさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るものはかりで、自分にも量り与えられるであろう。

なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。

自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。

偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。」(マタイ7:1-5)

私たちにあやまちがないのでなければ人をさばいてはならないと主は言っておられるように思われる。予言者サムエルが王を選ぶ時に経験したことを見れば、人に人をさばく資格がないことを一層よく理解できるだろう。主はイスラエルの王サウルを退け、新しい王を選ぶよう予言者サムエルに指示さ

れた。主はサムエルにエッサイの家へ行くよう言われた。エッサイには8人の子がいた。サムエルの前を油注がれて選ばれる子供が通り過ぎることになっており、サムエルはだれが選ばれた者かわかるようになっていた。長男のエリアブがサムエルの前にやってきた時、サムエルはこのエリアブこそ選ばれた者であると思った。しかし主はエリアブを拒まれ、サムエルに人を判断する鍵をお与えになられた。

「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る。」(サムエル上16:7)

ついで7人の息子がそれぞれ予言者サムエルの前を通り過ぎたが、いずれも退けられた。やがて最年少のダビデが連れてこられた。そして主はダビデを受け入れられたのである。

従って、私たちが人をさばくことのできない理由は明白である。私たちは心のうちを見ることができないのである。目に見えるあらゆる行動に動機があることを知っているが、その動機がわからないのである。よくない動機であると思っても、その動機自体は純粋なものであるかもしれない。

人の望みや信仰、目標を知らないでその人を正しく判断することはできない。違った環境、不平等な教育の機会その他多くの事情から人は皆同じ位置にいるわけではない。ある人は上の方から始め、他の人は下の方から始めてそれぞれ反対の方角を目指し、ある所で出会うかもしれない。問題はどこにいるかではなく、どちらの方向に向かっているかということである。成功または失敗にどれくらい近いかということではなく、どちらへ向いているかということである。私たちはみな弱くも

ろいものであるのに、どうして人をさばく座を自分勝手に勝ち得ることができようか。せいぜい人は、自分が目にするものしか判断できず、心の中や考えを判断することはできないし、まして隣人の可能性を判断するようなことは到底できるものではない。私たちは他人を批判してはならないのに、それをあえてしようとする、虚栄心や不正直、不道徳、陰謀といった人間の弱さや欠点を捜すようになり、またそれを見つげ出すと誇りを感じるようにさえなる。その結果、判断を下そうとする人の悪い面のみを見るようになるのである。

今日、各種のニュース媒体もまた、主として、論争の的となる主題や攻撃を受けている人に関心を払いすぎているように見られる。100のうち99は良いことをしているのに、たったひとつの欠点やあやまちのため、それを世間へ大げさに広めているのである。

私たちは、高潔な人の心を傷つけることになるかも知れないことなど考えもせずに、激しい非難や悪意ある話、あるいは活字などをうのみにし、それを広める傾向があるのではなかろうか。そんな時はたいがい「火のないところに煙はたたない」などと言い訳をしているのである。ところが実際にはその煙はあるしと深い人が起こした悪意という火によるものなのに、私たちがさらにその火勢を増しているのである。

時に私たちは、友人が間違いをおかしたことで非難されたり、友人のうわさが立ち始めると、その友人を裏切って、全部の事実を知りもしないのに、耳にしたことを受け入れて他人に言い広めることがある。誤った情報に基づいて時に友情がだめになったり、憎悪が生まれたりするのは全く悲しいこと

である。

この世にあって不可知論者の態度が認められるとすれば、それは人をさばこうとする時である。次のように勇気をもって言うべきである。「私にはわかりません。さらに証拠がそろうのを待ちます。問題を双方から聞いてみなければなりません。」

非難を引き延ばすことによって始めて真の愛が示される。どの犯罪者も公正に公開裁判を受ける権利があると知っていながら、他方では、偶発的なできごとに基づいて、隣人や友人をさばく傾向があるのは理解に苦しむ所である。私たちは確かに、心の底から、うぬぼれや激情、個人的な感情、偏見嫉妬などを取り除き、周囲の人々に慈愛を示しうるのである。

目に見えない欠点を捜し出すよりもむしろ長所を見いだすようにしよう。もし私たちが他人のあやまちを捜そうと思えば容易に目につくものである。家族でさえ、夫婦が互いに愛し徳性をほめ合わずに、欠点のみを捜し出し、それをとがめたために、離婚や家庭の崩壊を招いているのである。

私たちはまた、他人と調和せず、仲たがいすればするほど、他人のあやまちや弱さが目につくようになり、自分を改善するよりも、自分のあやまちを合理化し、正当化しようとするようになることを心に留めよう。教会の指導者や教義に対する深刻な非難は、ほとんど判で押したように、十分に自分の義務を果たしていない人や、指導者に従わない人、あるいは福音に沿って生活していない人々から出ている。

これについての顕著な例は、カインとアベルの話に見られる。カインは自分に与えられている務めを無視して、アベルの義と主の寵愛をねたみ、気ちがいじみたしつと心のため自分の兄弟

をあやめてしまったのである。もしカインが自分の兄弟を称賛し祝福してやり自己を改善し、自分の失敗を正そうとしていたら、カインの立場ははるかに良いものになっていたことであろう。

私たちは自分の生活や行動を吟味し自分を正しい原則に沿わせるようにし決して他人を攻撃したり、誤った情報を広めないようにしようではないか。

うわさ話は人をさばく最も悪いものである。舌は人間が持つ最も危険で破壊的な、人をあやめる武器である。邪悪な舌は、相手の名声や未来さえも台無しにしてしまう。人の名声に対する陰險な攻撃や、個人に対するいやなあてこすりや、いいかげんな言葉は、大きなカシの木を生命を奪ってしまう寄生虫のように恐ろしいものである。これらのものは、いかにもひそかに、目立たないで人の心の中にやってくるので、人はこれを防ぎえないのである。そこである人はこう言っている。「微生物をだますより、象をだます方がはるかにやさしい。」

もし私たちが、皆幾度となく耳にしてきた次の言葉を実行するなら、この世はどんなに違ったものになることだろうか。「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」(マタイ7:12)

私たちはこれとは反対に、皆、自分はどう判断して欲しいと望むのとは違った基準で他人を判断しがちである。

姦淫の罪を責められた女がイエスの前に連れてこられた時、イエスはその女を責めた人々の不義を憤られた。彼らは、自分ならこうさばかれないと望むのとは異なった標準でその女がさばかれるのを望んでいた。しかもある者はほかならぬこの姦淫の罪を犯してい

たに違いないのである。

イエスは言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこのこの女に石を投げつけるがよい。」そして身をかがめて、地面に物を書きつけられたあと身を起して女に言われた。「…あなたを罰する者はどこにいるか。」(ヨハネ8:7, 15)

もしイエスがかたわらにお立ちになり、私たちが責めている者をさばいてくださるようお願いした時に、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」と言われ、身をかがめて地面に物をお書きになったとしたら、なんと多くの者が良心を責められ、恥ずかしい思いでそこを立ち去らねばならないことだろうか。イエスの教えはいかにも正しいものである。

もし私たちが第二の大切な戒め、すなわち、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」(マタイ22:39)という教えを受け入れ、実行するなら、そうして真に隣人を愛することを学ぶなら、意地悪いうわさ話もなくなり、虚偽の申し立てもなくなるであろう。主の祈りに次のような言葉がある。「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもゆるしてください。」またイエスは言われた。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。」(マタイ6:12, 14-15)

キリストは赦しについて最も素晴らしい模範を示された。姦淫の罪で女がキリストの前に引き出された時、キリストは言われた。「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう

罪を犯さないように。」(ヨハネ8:11)

また十字架上でキリストは次のように祈られた。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

私たちには自我があり、うぬぼれ、不安定な感情をもちあわせてはいるがもし互いに愛しあい、赦しあい、自分のあやまちを悔い改め、人をさばくことをしないなら、私たちの生活は今より一層幸せなものになり、社会の福祉と他人の幸福のために役立てることができるだろう。

私たちは確かに、国の法律を実施するために裁判官を任命し、教会員をさばくために教会に判事をおいている。それでこれらの人々に重い義務と責任がある。しかしこの人々は国の法律や教会の律法にしたがって、正しいさばきを下さねばならないのである。

私たちは原理に、高い原理の上に立つてはいないか。また、政治家も含めて私たち全部が、非難や中傷を受けないような生活をするよう努めることはきわめて大事なことである。

他人をずたずたに引き裂いても、決して何物も得られないし、自分の性格を改善することにもならない。私たちは、熱狂的なキャンペーンの最中に口にした言葉や、批難の言葉によって、親密な友情が打ちこわされるのを目にしている。政府の高官や反対の立場に立つ者に対して、攻撃的演説を長々とすることは、政府のその人物はもちろん、他の人々、ひいては国家の政体そのものに対して、若者やその他の人々の信頼を失わせることになる。

両親として私たちは、これらの悪影響が家庭に及ばないようにする責任がある。また、すべての言葉、すべての行動が、子供の思考や態度に影響を及ぼすことを知らねばならない。子供が

他人と仲良くやっていくことや、愛、同情、他人への関心といった基本的な事柄を学ぶのは家庭の中なのである。もし両親が、皮膚の色や、人種、宗教階層、あるいは知的能力の差を理由にほかの子に対し偏見を持つことのないように、かつ主を愛するように、子供たちを言葉と模範によって育てるなら、以上の事柄は一層よく教えられることだろう。私は両親が本当は忍耐強く、子供たちをそのように教え育ててくれたことに感謝している。

私は心から主を愛し、隣人を愛していることを本当に謙遜な気持ちで申し上げたい。私はだれに対しても、いささかも自分の気持ちをかたくなにしていないうもりである。もし私のために気持ちを害した人がいるならば、許していただきたいと心から願っている。私は今救い主が言われた言葉を切実に感じている。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

世のあらゆる人々に対し、特にこの末日聖徒イエス・キリスト教会の教えを理解しようとせず非難する人々に対し私は、証を述べ、また、この回復された福音の中にある教えを知り悟るまでは、これをさばくことのないように強く申し上げる。私たちは皆さん方と同じように、神は生きてましまし、イエス・キリストは神の独り子、真実肉体を受けた独り子であり、この世にまさしくおいでになって、全人類が死から解き放たれるようにその生命を捨て、復活された方であると信じている。

救い主は言われた。「……これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1:39)そこで救い主は、私たちが神のみそばに立ち帰り、永遠の

生命を味わう備えができるよう、福音の計画をお与え下さった。

今日、まさしく福音は完全なままこの地上に回復されている。聖書は神の言葉であって、予言者を通じ私たちに与えられたものであることと、また同じように、モルモン経は神の言葉であり、古代アメリカ民族を導かれた神の真実の記録で、福音が完全なままのせられており、正しく翻訳されたものであることを証する。モルモン経はユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させるため、主の命令によって書かれ、また予言と啓示の「みたま」によって書かれたものである。

私はまた、教会の大管長である、ジョセフ・フィールドینگ・スミスが神の予言者であって、主は彼を通じて語りたいもうことを証したい。また、スミス大管長のかたわらで共に働ける機会のあることを心から感謝したい。

以上のことを私は知っており、真実であるとへりくだって証する。私は皆さん方が、モルモン経を読んで吟味し、そこに記されている次の約束をためてみられるよう、ひとりびとりに強く望むものである。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問い、もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。

そして聖霊の力によって一切の事の実であるかどうかがあなたたちに解る。」(モロナイ10:4-5)

この約束と私の証をイエス・キリストの御名によって申し上げる。アーメン。

ヒーバー・J・グラント

なすべきことを回避しなかった人

レオン・R・ハートジョーン

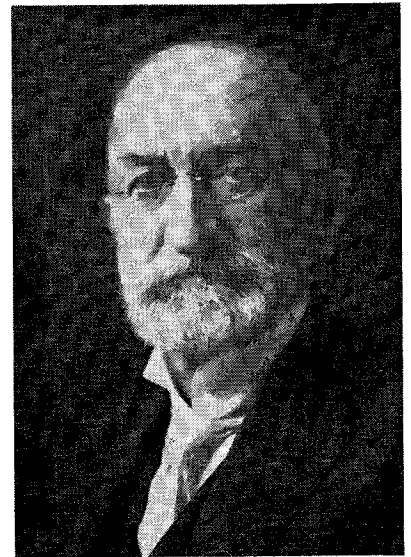
人というものは生涯、自分の行なわない事柄に対して、あらゆるいいわけをするものである。ある人は徴兵を拒否し、またある人は働こうとしない。ある人は責任を回避しようとし、ある人は疲労、病気、多忙、貧困、あるいは内気であることを理由にかかわりたくないという。自分は重要な人物であるから、もっと大きなことのためにしか才能を使わないと言う人もいる。だれか他の人に任せることに満足する人があり、また愛や平和についてまくしたて、善をなそうとする気持ちをくじこうとする人もいる。確かに、あらゆる種類の理由があり、あらゆる種類の人々が存在する。

しかし、そのような中に第7代大管長ヒーバー・J・グラントがいた。ヒーバー・J・グラントは少しでも良い理由があればすぐそのことにとりかかった。たとえ容易な仕事でなくても、ともかくも良い結果を得ようと働いた。彼は喜んでいるかのごとくチャレンジに応じ、熱意をもって不可能な事柄に取り組んだのである。ある物事を成し遂げるに必要な生来の資質を備えていないように思われたときには、そ

の能力が伸びるまで練習し祈るのであった。

ヒーバー・J・グラントは弁解しない人であった。教会を財政危機から救い、あるいはシオンの歌を正しく歌うときもそうであった。このように彼は育てあげられたのである。ブリガム・ヤング大管長（子供の頃ヒーバーはヤング大管長の家庭で数えきれないほど素晴らしい時間を過ごした）とレイチェル・アイビンス・グラント（ヒーバーの母親）は、共通してひとつのものを備えていた。ふたりは共に自己訓練の価値を知っていて、常に最善を尽くしていたのである。少年ヒーバーはこの特質を受け継ぎ、さらにそれを一歩進めた。なそうと心に決めた事柄は何事でも、主の助けを得れば、成し遂げられない理由は全くないことを信じて成長した。彼はしばしば次のエマソンの言葉を引用した。「物事を、継続して行なっていけば、容易に行なえるようになる。それは物事の性質が変わるからではなく、私たちの力が増すからである。」そして自分が説教した事柄は実行した。

ヒーバー・J・グラントは、野球の



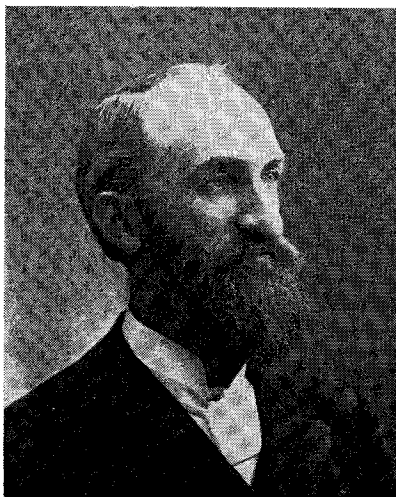
グラント大管長の最もよく知られている写真

投球練習をして最強チームの選手になったことや、字が上手に書けるように努力して自分を向上させたことを、好んで話している。彼の筆跡はついには非常に美しいものと称されるようになった。また、聖徒たちと共に教会の讃美歌を歌うことは素晴らしい礼拝の方法であると、説教壇から喜びを持って語るようになったのである。次いで、非常に多くの日数をかけてとてもたく

グラント大管長の表情には果たすべき偉大な召しを自覚している人の誠実さが表われていた



1901年9月1日、グラント長老と3人の宣教師は、横浜を見おろす小高い丘に登って、福音を説く地として日本の地を奉献した



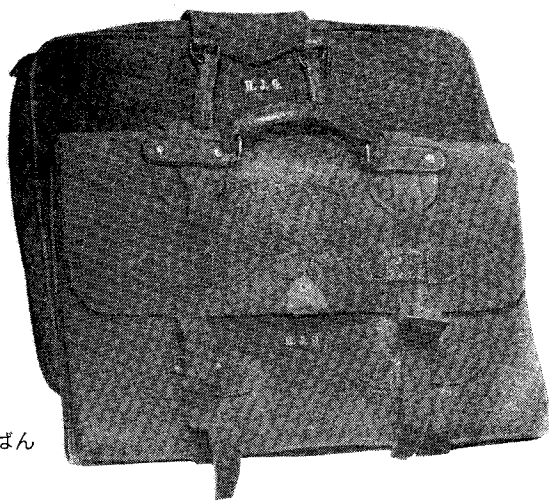
さんの讃美歌を学び、やがて誤りなく完全に歌えるようになったことを、喜んで語るのであった。

説教で好んで取り上げる話題のひとつは、仕事に忙しく取り組んで生活力を伸ばすように人々を励ますことであ

った。人の救いと昇栄の力は各人の内にあることを力強く説いた。ヒーバー・J・グラントはこのように言っている。「私たちは自分の生活を築く建築家である。しかもその生活とは、この世だけでなく、永遠の将来にまで及ぶ生活なのである。神は私たちに戒めを与えられた以上必ずその戒めを守る力をも与えて下さったのである。」そして彼は、日常生活でその力を完全の域にまで伸ばすように、力強く提案している。

ヒーバー・ジェディー・グラントは1856年11月22日、ソルトレーク市でジュデダイア・M・グラントとレイチェルの間に生まれた。父親はヤング大管長の副管長で、ヒーバーが生まれて9日目に亡くなっている。母親は、息子が成長して、素晴らしい夫よりもさらに偉大な使徒になるという慰めを与え

皮かばん



グラント大管長が長年使用した
美しい装飾を凝らした机

られた。そこで母は、彼の生涯の内にこの祝福を成就するにふさわしくなれるように「ふるまい」かつ「従順である」よう、いつも息子に忠告を与えた。

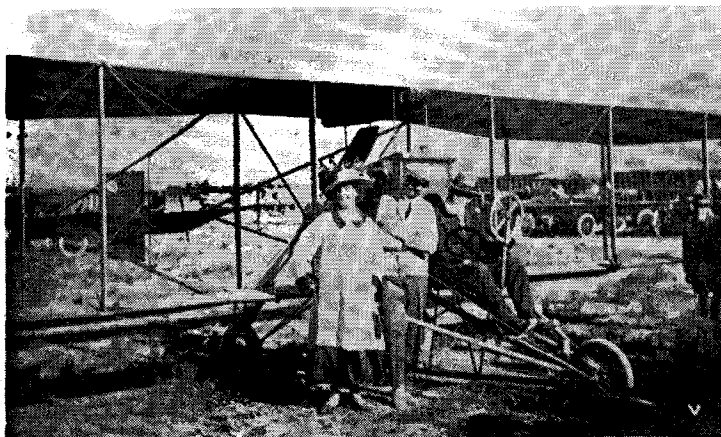
彼の生涯は人類の歴史上最も興味ある期間にまたがっており、教会の大管長としてまた予言者としての期間は、有能で恐れを知らぬ指導者を必要とした時期である。主は、ヒーバーが忍耐強くあり、諸々の原則に従い、またしっかりと神により頼むようになるよう取り計らいたもうたのである。

二度の世界大戦、経済恐慌、および全世界に及ぶ改宗者の急激な増加の時期に、偉大な民を強めるためこれらの特質が必要であった。

ヒーバー・J・グラントは、生涯家族との結びつきを密にしていた。子供たちや孫、また彼らが生涯を共にしようと選んだ人々との結びつきを密にしていた。家を離れて住んでいたひとりの娘はこのように語っている。「父はとてもよく手紙を書く人でした。私は父から手紙が来ると父に劣らずすぐに返事を書きましたので、私たちは互いに週に二度手紙を交換しました……手紙はいつも同じ文で始まりました。

『今は朝の2時（時には3時）です。なかなか眠れないので、愛する娘を手紙でちょっと訪ねましょう。父が亡くなった後、そのような手紙が来なくなったのを私がどれほど淋しく思ったか、だれも知らないでしょう。』

若い頃、ヒーバーはある集会に出席して、献金の依頼の話を聞いた。そこで集会後、彼は監督に50ドル手渡した。すると、監督は45ドル返して、あなたは5ドル献金すれば十分ですと言った。しかしヒーバー・J・グラン



当時の新しい人智の奇跡である飛行機に乗るグラント大管長



初めはラジオはぜいたく品であったが、グラント大管長の時代に普及した。これは1922年ソルトレーク市のK Z N局の最初のラジオ放送の状況を撮ったものである。後方にジョージ・アルバート・スミス大管長の姿が見える

トは50ドル全部を監督に渡して言った。「ウーリー監督、きょうこの集会であなたは、主が4倍に報いて下さるとお話しになったではありませんか。私の母は未亡人で、今200ドル必要です。」監督は尋ねた。「私が今この45ドルを受け取れば、すぐに200ドル得られると信じているのかね。」「その通りです。」そこで監督はそれを受け取った。その集会所から出て町を歩いているときに、ひとつのアイデアがヒーバーの心に浮かんだ。彼はそれまで知らなかったひとりの男の人に電報を打ち、商取引きが成立し。たヒーバー・J・グラントの収益は218.50ドルであった。次の日、彼は監督のところへ行って言った。「監督。先日50ドル献金した後で、218ドル50セントの利益を得ました。だから、什分の一として21ドル85セントお支払いします。21ドル85セントと18ドル50セントの差額は私が支払うことにします。主は、『4倍』の収入は与えて下さいましたが、その什分の一の額までは与えて下さいませ

んでした。」

あるときグラント大管長は、きびしい財政難に遭遇したが、「赤字はわずか9万2000ドルだけでした」と言うのがそのときの彼の言葉であった。

ヒーバー・J・グラントは、日本に伝道部を開設してそこを管理する召しを受けた。そして、出発に先立って準備と仕事のまとめに1年の期間を与えられた。

召しを受けたその会合の後、ひとりの使徒がヒーバー・J・グラントに、もし大管長があなたの困難な財政状態を知っていたら決してあなたを召さなかったでしょうと語った。グラント長老もそれに同意した。しかし、その瞬間からグラント長老はすべてを完全に主の御手に委ねた。そして毎朝「どうか負債を免れることができるよう、きょうも何か仕事をさせて下さい」と欠かさず祈った。その年の内に、すべ

ての債権者への支払いが済んだ。しかも負債を完全に払ったばかりでなく、伝道地で生活するに十分な資金をも得たのである。

身体の成長と共に、ヒーバー・J・グラントの神に対する信仰も成熟していった。妻が病気で危篤になったとき、ヒーバー・J・グラントは病室に子供たちを呼んで、母親が危篤であることを話した。このことを知ったひとりの娘が、母親を死なせないように彼に一心に願った。娘は母親のために神権を行使するように願った。その娘とはかの子供たちを部屋から出させ、彼は妻のベッドのかたわらにひざまずいて祈った。

「生と死、喜びと悲しみ、繁栄と逆境いずれにも主の御手があるのを認めていることを私は主に告げた。私は妻が危篤であることに苦情は言わなかった。しかし、私には妻が死んで行く姿

を見せる力がなく、妻の死が福音の儀式に対する子供たちの信仰に与える影響を恐れていると告げた。そのため私は、母親が死ななければならないのは主のみこころであるという証を娘のルティ（ルシー）に与えて下さるよう主に願い求めた。間もなく妻は息を引き取った。私は子供たちを病室に呼び、母親が亡くなったことを告げた。幼い息子のヒーバーは激しく泣き始めた。するとルティは弟を抱いてキッスし、泣かないように言った。主の御声がルティに臨んで、『あなたのお母さんが死んだのは主のみこころである』と言われたことを弟に話していた。ルティは私が祈ったことを全く知らなかった。この現われは私の願いに対する主の直接の答えであった。私はそれ以来このことをいつも心から感謝している。

ルティは大きくなって、YWMI A 中央管理会の会長になった。父親のヒーバー・J・グラントは、主の神殿で結び固められた両親から生まれたことをルティがどれほど感謝しているか大会で若い人々を前にして証するのを聞いたことについて、よく話している。グラント大管長は、結婚した当時まだソルトレーク神殿が完成していなかったことを思い出すと涙するのであった。というのも、友人たちが彼に、その神殿が完成するまで神殿結婚を待つように熱心に勧めていたからである。しかし彼は、まず何をおいても花嫁をセントジョージ神殿に連れて行って結び固めを受けるために最大の努力を払おうと決心した。（当時は数日がかりの旅であった。）

ヒーバー・J・グラントは自分自身に対してきびしかったが、人々の不完全

さをさばいてはならないことに気づいていた。この真理を学んだ時のことを次のように告げている。彼が教会に行ったとき、ある話し手がその話の中で幾つかの文法的な誤りを犯していた。

ヒーバーは、文法上の誤りの例を学校に持っていかなければならなかった。たくさんの資料が得られると考えた。しかしそれを書き留め始めたときヒーバーは確かに文法上の誤りを耳にはしたが、話している人の心に捕われてしまった。そしてこの話し手が、救い主が神の子であることとジョセフ・スミスの使命、およびこの教会における主の御業について証するのを聞くうちに、彼の目は涙にぬれていた。

グラント大管長は、次の言葉でその話を結んだ。「それ以後現在に至るまで、私は福音を説く人々の文法上の誤りや発音の間違いが気になったり、それでいろいろしたりしたことは全くあ

りません。私はそれが言葉の衣服で人をさばくようなものであることに気づいたのです。その日から今日まで、すべてに勝ってただひとつ私に感銘を与えてきたのは、福音を宣言するときに人が得る生ける神の靈感である『みたま』でした。言葉ではありません。何というかと金銭の獲得に励まねばならないこの人生で、人をひきつける方法を身につける機会を得られない人々がやはり非常に大勢いるからです。私はその日から今日まで、人々を心によって判断するように努め、それに成功してきました。」このようにヒーバー・J・グラントは、試みることを決して恐れず、より多くのことを学んだ後には心を変えることを一向にためらわず、また正しいと思ったことは守り通す大管長であった。いかなる犠牲もいとわず、また人が何を考えようと全く気にしない人であった。



ヒーバー・J・グラントの略歴

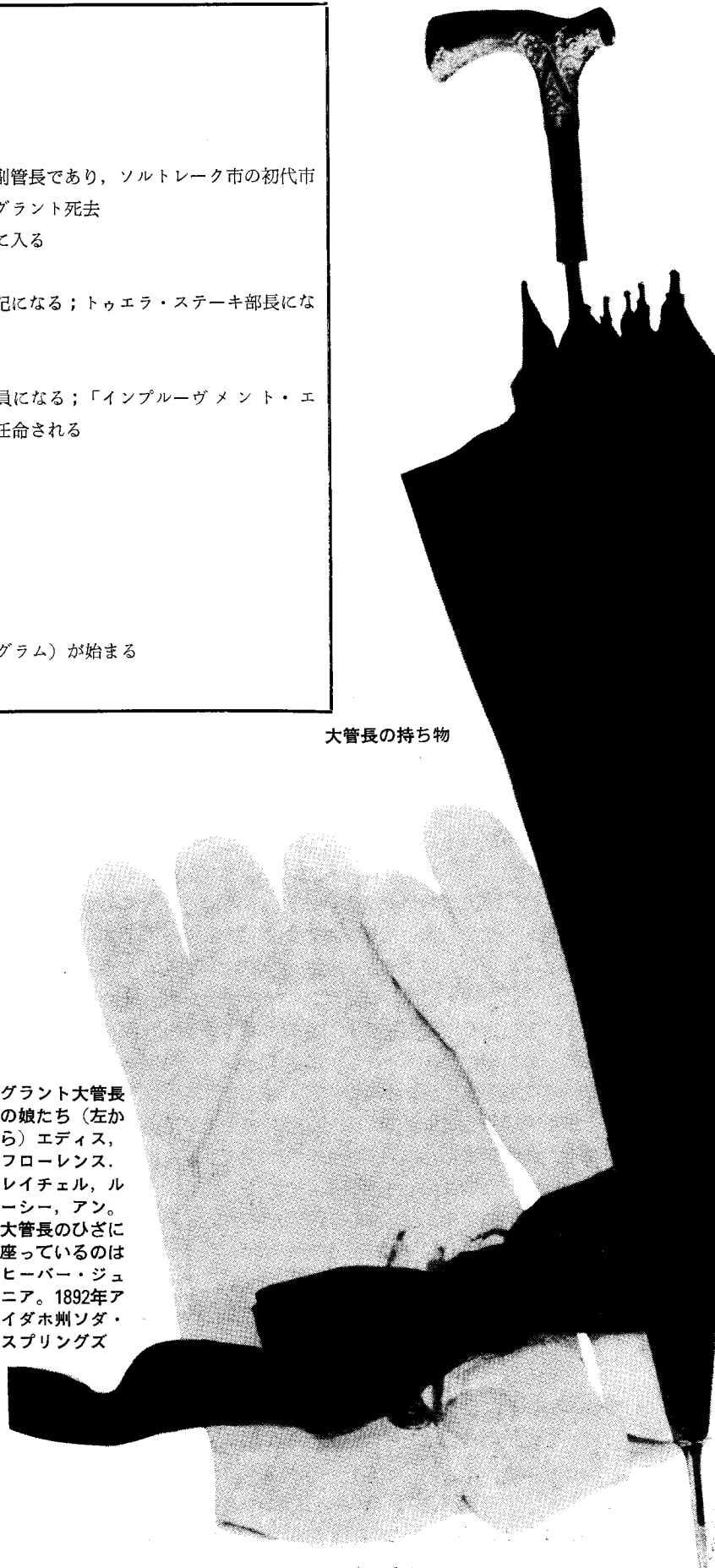
(1856—1945)

	年齢	
1856 11月22日	—	ソルトレーク市で出生
1856	9	ブリガム・ヤング大管長の第二副管長であり、ソルトレーク市の初代市長である父ジェデダイア・M・グラント死去
1875	19	最初のYMMIAの管理会長会に入る
1877	21	ルシー・ストリングムと結婚
1880	24	YMMIA中央管理会長会の書記になる；トゥエラ・ステーク部長になる
1882	26	使徒に聖任される
1897	41	YMMIA中央管理会長会の一員になる；「インブルーグメント・エラ」の創刊を援助し業務部長に任命される
1901—03	45—47	日本伝道部を開設し管理する
1904—06	48—50	英国と欧州伝道部の部長になる
1918	62	大管長として支持される
1919	63	ハワイ神殿を献堂
1923	67	アルバータ神殿を献堂
1927	71	アリゾナ神殿を献堂
1936	80	教会の保障計画（後の福祉プログラム）が始まる
1945 5月14日	89	死去

大管長の持ち物



グラント大管長の娘たち（左から）エディス、フローレンス、レイチェル、ルーシー、アン。大管長のひざに座っているのはヒーバー・ジュニア。1892年アイダホ州ソダ・スプリングズ



私の証

東京第2ワード部

毛利幸子

長いきびしい冬を耐え抜いて、すべての生命力が爆発する様に萌え出ずる北海道の5月は、希望に満ちた美しい季節です。梅、桃、桜、その他あらゆる花や、木々の若芽も一斉によみがえり、青空に輝く5月の太陽に映えるさまは、北海道ならではのすばらしい光景です。私は昨年5月、主人の転勤で2年程滞在した札幌でバプテスマを受けて、新しく生まれ変わったのです。

私が改宗するについて、ふたつの大きな障害がありました。ひとつは、私自身、神を信ずることができなかったし、また、求める心もなかったのです。私は元来、人間がこの世で正しく生きて行くためには、自分の良心に従い、世のため人のためになるよう、自分で判断して行けば良いと考えており、宗教の必要性を認めなかったのです。第二に、私の主人が300年続いた神官の家の長男であり、将来は、その神社のあとを継がなければならない立場にあるため、私の改宗は考えられないことだったのです。

一昨年8月末のある夕方、ふたりの宣教師が私の家を訪れて来ました。教会のことは別にして、彼らがその若さで、親元を離れて自炊生活をしながら伝道をしていると言う点にすっかり同情して、私たちはたちまち友達になってしまいました。その後、断わり切れないまま家庭集会を受けることになったのですが、レッスンは、1回目からうんざりしてしまいました。特に信じてもないのに一緒にお祈りをさせられるのが心外でした。しかし私はレッスンの後、彼らと過ごす時間が楽しく、いつも前日から腕をふるって料理をし、遠くにいる息子でも帰って来るように、いそいそとして迎えたのです。そのような状態で3カ月が過ぎ去りましたが、その間私は一度も神様のメッセージに耳を傾けようともせず、またお祈りを頼まれても、きっぱり断っていたのです。でも彼らは辛抱強く毎週欠かさず来て下さいました。そしてやがてあの記念すべき12月11日がやって来たのです。

その日は、日中になっても気温が氷点下で雪の降り続く寒い日でした。朝から、例によって御馳走を作り、待っていました。彼らが約束の時間に来るや否や私は言ったのです。

「寒かったですよ。きょうはおいしいイタリア料理ですよ。レッスンは早く済ませてお食事にしましょう。」ふたりはちょっと困った顔をして、「きょう、私たちは断食しています。せっかくですがいただくわけにいきません。」そしてレッスンの後、自分たちがこんなに誠意をもって神様のメッセージをお伝えしているのに、どうしてわかってもらえないのかと尋ねました。私は、たいへん済まない気持ちになって、そのとき初めて家庭の事情を話し、改宗できない理由を説明しました。そして、私たちは宗教を越えて、お互いにお友達として、助け合いましょう。何か不自由なことがあったら喜

んでお役に立ちましょう等と言いました。ふたりは非常に驚いた様子で、やがて、私たちは何も力になれなくて済まなかったけれど、神様を求める気持ちになれば、きっと喜んでお助けしますと言って、最後に長い長いお祈りをして下さいました。彼は「毛利さんが、あなたの福音を受け入れないのは、自分たちの力が足りなかったからで、すべて私たちに責任があるのです。彼女は今まで会ったどんな人よりも、の暖かいお父様の娘となるにふさわしい人です。私たちが一番改宗してもらいたい人です。どうぞ彼女を見捨てず、変わらぬ祝福を与えてあげて下さい。」という意味のことを切々と、10分以上も祈り続けるのです。19歳の少年が、自分の母親位の年齢の私のために、必死で神様にとりなしを願ってくれたのです。私は非常に強い衝撃を受けました。それはまるで頭をがんとぐられたような、胸の中に冷水をどっと注ぎ込まれたような強い衝撃で、目の前が真暗になる位でした。やがてふたりは、悲しそうにして別れを告げたのです。最後に、「時々私たちが言ったことを思い出して下さい。そしてもしお祈りを始めたら、すぐ知らせて下さい。」

ひとり残された私は、何とも形容し難い、みじめな気持ちに襲われ、体中の力が抜けて地底へひき込まれるような感じで、2、3時間もじっと椅子にかけていました。いつの間にか夕闇が迫った室内に電灯もつけず、ぐったりとすわり込んでいたのです。そのときふと、一条の光がさし込むように、「お祈りしよう、そしておわびしなくては」と思いつきました。

私はそのとき生まれてはじめて、「天のお父様」と呼びかけて、心からお祈りしました。祈っているうちに、何とも言えず気持ちが楽になり、自分が許されていくことがわかったのです。まるで目の前にかかっていた幕が、ぱっとあけられたように、自分が今までどんなに傲慢であったか、神様に対して不尊であったか、はっきり知りました。その夜はほとんど眠れずに、宣教師の言ったことは真実ではないだろうか、神様はほんとうに生きていらっしゃるのではないか等と考え続けました。

翌12月12日は土曜日で、主人が休みのため、昼前から買物に出かけ、外で昼食をとることになりました。しかし昨日以来のことが頭から離れず、そのことばかり考えていました。買物を済ませ、食事をしているとき、急にひとつの考えが浮かびました。きょうこれから帰り道に、もしあのふたりの宣教師に正面からばったり会ったら、「私はお祈りを始めました」とそれだけ言おう。私が改宗することは、あるいは家庭を失うということになるかも知れないが、とにかく、それは言わなければならないと強く決心しました。食事の後、ぶらぶら歩いて市電の停留所まで来てしまいました。わずか200メートル位の距離で、しかも人口百万の札幌市の真中で彼らに会うことは、もともと無理でした。内心ほっとしたようながっかりしたような複雑な気持ちでした。そのとき突然主人が明治屋に寄って行こうと言いつつ出たのです。

その日は天気も良く、師走の土曜日の午後、クリスマスも近いとあって街はたいへんな人出でした。信号を渡って、す

すきの方へ約20メートルも歩いたとき、私は思わず棒立ちになりました。間違いなくあのふたりの宣教師が、こちらに歩いて来るのです。私は我れを忘れてふたりの前に立ちふさがり、「私はきのうはじめてお祈りをしました」と大声で叫んだのです。その瞬間、私の心はすっかり別なものになりました。まわりのすべてがばら色に輝いていました。大きな大きな力が私をしっかりと包んでいるような安定した静かな気持でした。「ああ、やっぱり神様は生きていらした！」街の騒音も、神を賛美する歌に変わっていました。私はこのようにして、神様から新しい心をいただいたのです。

私の行く道は決まりました。私はこんなに大きな力で導かれたのだという感激で、それ以来夢中で勉強を始めました。家庭集会レッスンもまた一から始められたのです。その日以来、信じられないことが次々と起こりました。「キリスト教にかぶれたら大変だから」と言って教会行きに反対していた主人も突然バプテスマを許してくれ、皆に祝福されて、6ヵ月後の5月23日、聖徒の群れに加えていただいたのです。

バプテスマの翌日、すべてを手紙に書いて、両親に知らせました。胸の中に溢れる程の幸福感と感激を、やむにやまれぬ気持で便箋20数枚に書き記し送りました。もう老い先のそう長いとも思われない両親に、神様の福音を理解してもらいたい一心でした。ちょうど時を同じくして、母が狭心症で倒れたとの知らせがありました。血圧も高く、非常に危険な状態でした。私は断食して、毎朝毎晩お祈りしました。「母がこの世にある間に福音を知り、自由意志で受け入れることができる機会をお与え下さい。もし母にその命が無いものなら、私の残りの命から分けて母に与えて下さい」と言うてお願いしました。

3ヵ月が過ぎ去りました。その間小さな発作で苦しんだ模様でしたが、そろそろ秋風の立つ頃だいぶ落ち着いたので、病院で心電図をとったのです。そのとき主治医が初めの心電図と比べて、看護婦に、「これは別人のを間違えて持ってきたのでしょうか？」と言ったそうです。それ程症状は一変して良くなっていたのです。医学的に説明がつかない程、心臓の状態が好転していたのです。神様は、実に私の祈りをお聞き届け下さいました。そして、私の再々のすすめでやっと両親が重い腰を上げて、ふたりそろって教会へたずねて行ったという知らせを受けて、1週間目に、主人の転勤で私共はまた東京へ住むことになったのです。やがて家庭集会を受けるようになった両親のもとへ、私は、レッスンの日をねらって訪ねては一緒にお祈りをしたり、励ましたり致しました。神様の大きな愛と導きをいただいて、ふたりはそろって、4月2日にめでたく第5ワード部でバプテスマを受けることができました。私は第2ワード部に属しており、ワード部は別ですが、同じ信仰を持ち、お互いに最後の日まで耐えれば、次の世でもまた同じ所で住めるという大きな希望をもってがんばっております。私の場合、まだ家庭の事情が解決した訳ではないのですが、決して希望を失わず、願い求め、信じていれば、必ず神様は最善の道で解決して下さいます。私は、必ず

主人も共々昇栄できるよう、ふたりそろって神様の御もとに参れるよう、人間の力の及ぶ限りの努力をし、また自分自身を高めるようにがんばって行きたいと思っています。神様は必ず私たちをお見捨てにならないことをよく知っているので全く不安はありません。

私たちの伝道活動

大阪ステークス部伝道部長

小 松 忠

昨年(1987)の12月24日、安息日の集会を終えたステークス部宣教師たちは、天王寺駅前に集まり、特別な伝道集会を開きました。日曜日の午後とあって多くの人々が耳を傾け、モルモン経と讃美歌を手に歌うクリスマスのメロディーは、人々の心をなぐさめました。2時間にわたってモルモン経を売ったりコンタクトしたり、皆楽しく伝道しました。

現在30名のステークス部宣教師が召されていますが、皆開拓者の熱意をもって一生けんめいがんばっています。彼らは、自分の仕事や学業を持ちながらイエス・キリストの良きおとずれを宣べ伝えていかなければならないので、ほんとうに大変なこともあります。しかしその犠牲と奉仕によって多くの証と祝福がもたらされることを知っていますので喜んで働くことができます。

12月の大会で、清水伝道部長はすばらしいメッセージで励まして下さいました。「この世の中に福音よりも大切なことはないのです」と話されました。福音に従うことによって他に得られない幸福を得ることができるからです。その道を宣べ伝えることができることをほんとうに大きな祝福と感謝しています。

ステークス部内には100名近い専任宣教師が、よく伝道して下さいます。一昨年は「モルモンセブン」、引き続いて「モルモンフレンド」と歌の宣教師のプログラムが伝道に大きな助けとなりました。彼らの働きによって紹介カードをたくさん得ることができましたので、今後の伝道に大きな成果が期待されます。今年は、ぜひともステークス部宣教師たちの手でこのようなプログラムを催したいと考えています。

ヒュー・B・ブラウン長老は、数年前に大阪でこのように言われました。「今、ここにいる若い人々が将来、指導者になって人々を導くでしょう……。」その時が今、この関西の地にやってきました。神様の御手が、このすばらしい日本の地に置かれています。ほんとうに神様は生きておられ、この末日にジョセフ・スミスの前に現われたもうたことを心から証いたします。皆様とともにこの日本の地に住む多くの人々に私たちと同じ喜びを分け与えるために、力を尽くしたいと思っています。

今、神様の御業がこの大阪の地に急速に伸びつつあります。私たちは、さらに努力し多くの人々とこの福音を共にしたいと思っています。

私の証

鹿児島支部

山下 兼 義



最善の努力をしたが試験に失敗した、何の落ち度もなくまじめに働いていたが、やめざるを得なかったとかいうようなことが世間にはしばしばあります。そういうときに世間の人は、「あなたは最善の努力をしたというけれども、やはりまだ努力が足りなかったのだ」とか、「何の落ち度もなくまじめに働いていたというけれども、上の人から見ればやはり足りないものがあつたのではないか」と反省を強いられます。

そういうとき、末日聖徒となり種々福音について教わた今の私は、それは神様のみこころによってなされたのであるとはっきり言うことができます。世の中が複雑になればなる程、個人の能力でどうすることもできない問題が増えてきます。確かに幾多の経験がそういうときにも役立つことになるのです。

終戦の頃、地方の工業学校に勤めていた私は、職業軍人だった父の影響から、一家の生活のために、またスリルを求めてたびたび職を替えました。現在の会社に入ってから年老いた親を残して転勤できず、同じ店で係を次々に替わって今2回目をまわっています。

宗教においては、親の代からプロテスタントの信者で、私も末日聖徒となるまでは、日本基督教団に属する教会の会員で、その役員までもしていました。その私が改宗したのです。

昨年夏頃よりブームに乗って急に職場が忙しくなり、残業で朝帰りが続くようになりました。家庭生活がおろそかになり、日曜日も出勤しなければならぬ状態にあつて、職業を通じて神の栄光をあらわすというプロテスタント的信仰に疑問を持ち始めたのです。仕事に生きがいを持ってと言われても、生産から販売まで一貫した中での仕事をやっていた時代ならともかく、ベルトコンベアーの一端を担うような現在の仕事の価値について考えもしました。私を中心にして4人の係の3人まで辞表を出した中で、皆をなだめながら仕事に取り組ませていました。牧師さんに相談したところ、神の栄光をあらわすことのできるような職業へ替わることも止むを得まいというようなお答えをいただいたこともありました。

ちょうどその頃、宣教師の方々の来訪があり、いつの間にか週1回のレッスンを家族で受けるようになっていました。7カ月もレッスンを受けていましたが、やっと8カ月目になり、遂にモルモン經を読み始めました。そして、パプテスマ

を受け、日本基督教団の教会員から末日聖徒イエス・キリスト教会の教会員に変身したのです。

私の家に最も多くお訪ねくださったスチュワート長老を通して受けた衝撃はすばらしいものでした。

スチュワート長老は、たいへんよく勉強しておられ、人の心の中を見透す力をもっていらっしゃいました。「あなたの好きな聖句はこれですね」とおっしゃって、ピリピ人への手紙第4章13節をお示しになりました。この聖句は、私の40有余年の信仰生活を支えてきた聖句でした。

また私たちが若い頃、プロテスタントのある有名な宣教師が鹿児島に見えて生活の目標について講演なさったことがありました。

第一に精神的基盤を持つこと。もちろんイエス・キリストに仕えること。

第二に資本主義時代である。お金もないがしろにすることはできない。経済的基盤も必要である。

第三に社会的地位がなければならない。社会的基盤も作らねばならぬ。

私たちは、この3つの基盤のバランスをとって生活してきたことを話しましたところ、スチュワート長老は「そんなにお金が必要でしょうか？ そんなに地位が必要でしょうか？」

そのとき私は、「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困る者也。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬ也。されども斯様の人は風俗の眼には見得られぬぞ」との西郷隆盛の言葉を思い出し、まさか異国の若い宣教師の方から西郷さんの教えを受けようとは思ひもよらぬことでした。まず神の国と神の義とを求めればすべては解決するということをそのときはっきりと教えられたのでした。

スチュワート長老による導きは、私たちを眠らせぬぐらい心の中をゆさぶるものがしばしばありました。死に臨んだような場にあつても、神の愛は平等であり、永遠の生命を得ることこそ真の幸福であると、たじろぎの片鱗も見せられぬことごと私たちは目をみはるばかりでした。

私はここにおいて決心したのです。教会の役員の任期満了の2年後改宗することでした。

しかし最初の頃、訪問してくださった田具長老のいらっしゃる柳井とスチュワート長老のいらっしゃる福岡の教会を訪

れたとき、私たちはそこにまことに福音が生きていることを感じたのです。1日において渡辺伝道部長、スチュワート長老が別の用件で鹿児島に來られ、その折り開かれた求道者会で伝道部長さんのお話を聞き、その夜、2年先の改宗が2週間後バプテスマを受けることになったのです。

10月22日早朝、40有余年の信仰を捨て、新しく末日聖徒として生まれ変わるためにバプテスマを受けました。

波は荒れていましたが、真暗な空の一面がぼっかりと開き星がひとつ輝くなかで私共は念願どおりスチュワート長老からバプテスマを受けることができました。

今、ふりかえってみると、神様の愛をしみじみと感じています。最初ハーディ長老、田具長老のご訪問がなければこのような喜びを得ることはできなかったことでしょう。ライオン長老のすばらしい絵でモルモン経に親しみを覚え、聖句を知り、西条長老はじめ多くの長老の方々の愛と祈りに支えられ、牧支部長の熱意も相まってこの喜びを得ることができました。

また、子供もフィルモア長老の暖かい導きでクリスマスの朝バプテスマを受け、家族全員末日聖徒となることができ、大いなる祝福を感じています。私共は、神様の大きな愛と御恵みに心から感謝の祈りを捧げるものであります。

これらのことを尊き御子イエス・キリストの御名によって証致しました。アーメン。

私の証

浜松支部

石井丑太郎

青春の時代を過ごす中で人間の生涯についての疑問はいつも心を動揺させていた。そしてある時期は哲学をひもとき、時には聖書を手に取り、また教会の門をくぐることもあったが、その疑問について解答を正しく与えてくれるものは何ひとつなかった。従って真の人間の価値、生きがい、または幸福について理解し、自分を納得させることはできなかった。そのような状態で人生の大半を昨年まで過ごしてきた。そうかと言って毎日の活動を怠ったというわけではなく、普通の人間としての使命は果たしてきたことは偽りない事実である。その中で、20余年前の風水災のことを特筆しなければならないだろう。そのとき起きた山津波は、無惨にも我が両親をはじめとする家族の生命を奪い去り、人間の肉体の弱さを目のあたりに体験させた。この悲劇は一生忘れられない。また今まで疑問を持ち続けてきた心に新たに死の恐

怖を投げかけたできごとであった。こうした経験を経ながら年を重ねる中で、何か特技を身につけることの必要を感じていた。ある日突然、当教会宣教師がふたりで偶然にも我が家を訪ねてきたので何気なく迎えた。幸い今まで心にこもっていた疑問を遠慮なく投げかけ、ひとつずつそれについて話し合った。それから毎週のレッスンを重ねるごとに少しずつ理解でき、心のわだかまりを解いてくれるきっかけとなり、また同時に前々より希望していた英会話も可能となると考えられ、これに心を傾けた。この偶然のことが我が生涯の救いの第一歩となったのである。およそ2カ月余にしてバプテスマを勧められた。しかしまだまだ我々は聖典の知識もまたその実践も未熟で、かつまた、疑問も残っているので少し躊躇した。そのとき宣教師は「完全な人はひとりもない」と言ったので、不安はあったが彼に従った。これが今月我々の第二の救いとなった。我々は会員となって日一日と安息日を重ね2カ月程経ったとき、サタン誘惑があつて教会に通うことができなくなった。しかし神の助けがあつて再び教会への導きを与えられ、祝福を受けながら日ごとに少しずつ成長することができるようになった。会員となって半年経ってハワイ神殿訪問の募集があつた。

自分はその資格はなかったが、必ずそれまでに心に強く誓い、これに申し込んだ。そして神殿訪問による結婚の結び固めの喜びと、真の人間の幸福への挑戦にidonだ。もちろん神殿訪問は長老の資格が前提となるので、会員としてふさわしい知識行動を一步一步積み重ね、神の導きによって毎日の行動を続けていった。そして心からなる感謝と祈りによって毎日の活動の中に目標をおき、自らを律しながら努力できる喜びを見いだすことができ、少しずつ証を強く持てるようになってきた。こうした中で東京大会の日を迎え、長老への聖任の途中、心にひらめきを覚え、胸に熱湯を注がれたような熱さを感じた。果たしてこれでよいのか、否、数倍もの努力がこれから必要であるとひしひしと迫るものがあつた。長老への聖任とハワイ神殿訪問の二重の機会が与えられたことを心から感謝し祈りを捧げた。これが第三の祝福となった。それから日一日と過ごす人との交わりの中で、人を愛すること、ねたまぬこと、感情に走らぬこと等の難かしさを認識し、そのつど神の力によってこれを実行に結びつける努力をしている。また我々が人間である以上時々遭遇する独善的態度をしりぞけ、またそのような人を助けて真の人間の生活の改善に役立たせるよう力を尽くしたいと思う。こうする過程には苦痛と寛容等が伴うのが常であるが、忍耐とたゆまぬ努力によって少しずつ克服することができる。多くの人々の上にもこのような導きがあるように祝福を願い、常に心を清く保ち、また神の戒めに従い、「みたま」が我が宮居にましますよう祈りと感謝を捧げる毎日を過ごしたいと思っている。

